
影の世界

紅佐洲仮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

影の世界

【Nコード】

N9961G

【作者名】

紅佐洲仮

【あらすじ】

『死を決意した私に生きる希望をくれたのは貴方でした。』黒の組織の一員…、アイリス。彼女が組織を脱走する前に何があったのか？彼女が出会った大切な人とは？幸せを知らない彼女が出会った幸せ…。その幸せは余りにも短く、悲しく、儚いもの。『貴方に出会えて本当に良かった…。』この話しはアイリスが組織を脱走するまでの話し…。『黒い影』『黒い罌』『黒い真実』のエピソード0。

第0章　く序章く（前書き）

こんにちは紅佐州仮です。

今回、『影の世界』を書いて行きます。

なるべく『黒い影』『黒い罠』『黒い真実』に話を合わせて行きますが、もしかしたら矛盾する所が出て来るかも知れませんが、そこはご了承ください。

では、『影の世界』よろしく願います。

第0章　（序章）

真夜中の東京は月が照らし、ネオンの明かりが輝いてる。

とあるビルの屋上で一人の女性が佇んでいる。

佇んでいる女性は20代前半ぐらいの女性で、髪はブロンドで少し肩に掛かるぐらいの長さだ。瞳は透き通る様な碧い瞳をしていて、整った顔立ちをしている。

ビルの屋上には彼女だけしか居ない。周りには誰も居ない。

彼女の横を強い風が何度も吹いている。風が吹くたび彼女の髪が揺れる。彼女はその風を感じながらポケットに手を入れた。ポケットからゆっくり手を出した。彼女の手には拳銃が握られていた。彼女は拳銃を頭に当てた。彼女の手はゆっくりと引き金に手を伸ばした。

「ダメ…！」

屋上のドアが開いて背後から叫び声が外に響いた。彼女はゆっくりドアの方を振り向いた。

『死を決意した私に生きる希望をくれたのは貴方でした。』

第1章 く雨の中の悲劇く

4月に入ってから最近は良く雨が降る。3月までは春の陽射しが出ていたが、4月に入ってから空は雨か曇り空で太陽は姿を余り現していない。

「また、雨かよ…。」

工藤新一は傘をさしながらため息をついた。

「最近、多いよね。」

新一の隣を傘をさしながら毛利蘭が歩いている。雨が降って春の風物詩の桜が悲しく散っている。

「桜が可哀相だね。」

蘭は雨に濡れて落ちて来る桜の花びらを見ながら答えた。
桜の花びらは地面に落ちた。

「そうだな…。」

新一は地面に落ちた桜に視線を落とした。

「あ、遅刻する…!」

蘭が急に声のトーンを上げた。新一が蘭の方を見ると、蘭が携帯の時計を見ながら焦った顔をしている。

「じゃあ、急ぐか。」

「うん。」

新一と蘭は雨の中を走って帝丹高校に向かって行った。

朝方から降り始めた雨は時間が経つに連れて雨の勢いが強くなって行く。都内の路地裏を傘もささずに一人の男が走ってる。

その後ろからレインコートを着た人物がナイフを持ちながらその男を追っている。走ってる男の服や靴は雨で濡れている。男はそんな事は構わずこの危機を逃れる為に走っている。

しかし、レインコートを着た人物は不気味な靴音共に男を追って来ている。走ってる男はちらっと後ろを見たが、レインコートの帽子を被っていて顔は見えない。走ってる男は舌打ちをしながら視線を前に移した。

「!!!!」

視線を前に移した途端、男は驚いた。目の前は壁にしかなくて行き止まりだった。周りを見たが、周りは壁に覆われていて逃げ道がない。元の来た道を振り返ると、レインコートを着た人物が不気味な靴音共に男に近付いて来た。

「止めてくれ……」

男は後退りしながらレインコートを着た人物に言った。レインコートを着た人物はナイフを構えて男に向かって走った。

「やめろ！やめろ！」

男は必死に訴えるがレインコートを着た人物は男の腹部に向かってナイフを刺した。

「うわああああ…。」

男の悲鳴が雨の音に消されて行った。

男が死んだ事を確認してからレインコートを着た人物は男に近付いて、男のポケットから財布を取り出して財布の中身を見た。しかし、直ぐにポケットに入れた。次に反対側のポケットを調べた。反対側のポケットには携帯電話が入っていた。レインコートを着た人物は携帯電話をポケットに入れて、元来た道を走って戻って行った。

第2章　く日常く

「お、工藤…、夫婦揃って登校か？」

遅刻にならずに学校に登校出来た新一と蘭が教室に入った途端、クラスメイトからからかわれた。

「そんなんじゃないよ。」

新一は不機嫌そうに答えて自分の席に向かった。

「蘭、おはよう。」

「あ、園子おはよう。」

鈴木園子が蘭に近付いて挨拶した。

「昨日のドラマ見た？」

「見た、見た。」

蘭が嬉しそうな表情をしながら答えた。

「凄く良かったよね。とくに、最後が…。」

「うんうん、良かった。最後、泣きそうになったもん…。」

蘭と園子は昨日のドラマの話題で盛り上がっていた。

「（あゝ、眠い。）」

席に着いた新一は欠伸をしながら目を擦った。

「（昨日、夜遅くまで読んでたからな…。）」

新一は昨日の事を思い出しながら窓を見た。外は土砂降りの雨が降

っている。

路地裏の前にはパトカーが数台止まっていて、周りには野次馬が集まっている。路地裏の前に居る警官が険しい表情をしている。

「死亡したのは野口雄太さん、34歳。都内の銀行に勤めている銀行員です。」

野口雄太の死体を鑑識が写真を撮ってる途中、警視庁捜査一課の高木渉刑事が上司の目暮十三警部に伝えた。目暮は高木の報告を聞きながらポケットから財布を取り出した。

「中身は取られてない様だな。」

目暮は財布の中を覗きながら答えた。財布にはぎっしり札束が入っていた。目暮は免許証を見つけて取り出した。

「物取りの犯行ではないと…、怨恨ですかね？」

「まだ、分からんよ。」

目暮は辺りを見回した。しかし、辺りには何もなかった。

「先ずは周囲の聞き込みを開始するか。」
目暮は刑事の顔をしながら路地裏の出口に向かって歩き出した。高木も目暮に続いて歩き出した。高木はちらっと野口雄太の死体を見た。野口の表情は恐怖に怯える顔で空を見上げていた。高木は死体から目を反らし、路地裏の出口に向かって歩いて行った。

「授業は此処までだ。今日、渡したプリントは次の授業までにやって来る事…。」

チャイムが鳴った途端、男性教師はプリントを揺らしながら言った。

「はい…。」

生徒達の面倒そうな返事が教室内に響いた。男性教師は返事を聞くと、教室から出て行った。男性教師が出て行った途端、教室内は騒ぎ始めた。

「残念だったな、工藤。今日はサッカーは出来ないな。」
新一の前に座る村上と言う男子生徒が新一の方を向きながら言った。

「普通、こんな雨じゃ出来ないだろう。」

新一は眠そうな顔をしながら窓から外を見ている。

「あゝ、雨が降ってなかったらサッカーが出来たのにな。」
村上が詰まらなさそうな顔をしながら言った。

第3章 〱火事？〱

東京で殺人事件が起きてから数時間後、千葉県のとある公園で人が木の目の前で雨に打たれながら血を流しながら倒れている。死体の周りには刑事や警官や鑑識が死体の周りを調べている。その死体の前に若い男性刑事が鑑識と何かを話している。

「田神。」

田神と言われた若い男性刑事が後ろを振り返ると渋い顔をした男性が立っている。

「川奈警部…。」

その渋い顔の男性は千葉県警捜査一課の警部だった。そして、若い男性刑事の田神は千葉県警捜査一課の刑事だ。

「被害者の名前は？」

「被害者は益山翔太、33歳です。益山翔太は千葉の銀行に勤めている銀行員です。」

田神は上司の川奈に報告した。

「第一発見者は…？」

「あそこです。」

田神は指をさして第一発見者が居る場所を川奈に教えた。川奈は田神が指をさした方を見ると、40代ぐらいの女性が刑事に付き添われていた。女性は怯えた顔をしている。横に居る刑事が落ち着かせようとしている。

「第一発見者の女性は買い物の帰りにこの公園を通るみたいです。家がこの公園の近くにあるみたいで…。」

田神は川奈に報告した。

「犯人は見たのか？」

「いえ…、見てないそうです。」

田神は首を横に振りながら答えた。

「よし、此処は他の者に任せて行くぞ。」

「え、何処行くですか？」

田神は歩き出した川奈に尋ねた。

「決まってるだろう！被害者が勤めている銀行だ。つべこべ言わず、車をまわして来い！」

「は、はい…。」

田神は川奈の怒り声に戸惑った声を出した後、車を止めてある場所まで全速力で走って行った。

「じゃあね、新一。」

教室の前で蘭が新一に大きく手を振った。

「帰る時は気をつけろよ…。」

新一は鞆と傘を持ちながら教室から離れて行った。蘭は新一が視界から見えなく為ってから部活に向かった。

新一が学校の玄関に着くと、新一のクラスメイトが数人が帰ろうしていた。クラスメイト達は新一に『じゃあね』『また、明日な』と言って帰って行った。新一は下駄箱から靴を取り出して、靴を履いた。

「（朝より酷くなってるな。）」

新一は傘をさしながら学校の玄関を出た。新一の傘に雨が大きく当たった。今にも、傘に穴が開くくらいの雨の量で新一は早く帰ろうと思ひ歩くスピードを上げた。

新一は傘をさしながら帰路についていた。ある程度歩くと新一の家

の屋根が見えて来た。新一の家はこの付近で1番大きな家で、屋根が良く見える。新一が家に近付き始めた時、新一は歩くのを止めて立ち止まった。

「（なんか、焦げ臭いな。）」

鼻の周りに煙りの様な焦げ臭い匂いが新一の家の近くから匂って来る。

「（まさか、火事か!）」

新一は焦げ臭い匂いがする家に向かって走った。新一は焦げ臭い匂いがする家に着いた。そして、その家の表札を見た瞬間、新一の表情が呆れた顔と安心した表情をした。表札には『阿笠』と書かれていた。新一は阿笠の家のドアを開けた。家の中から煙りが出て来て、新一は咳込んだ。

「（今度は何を作ったんだ?）」

新一は咳込みながら阿笠の家の中に入った。

「博士、何処に居るんだ?」

「おお、新一君。どうしたんじゃない?」

この家の家主、阿笠博士が新一に近付いて来た。

「どうしたじゃねえよ。何をしたんだよ? 外まで匂って来たぜ。」

新一は博士に怒りながら尋ねた。

「すまんの。料理を作ってたら電話が掛かって来てのう…、ついつい話しが長引いたんじゃない。」

新一の顔を見た博士が頭を摩りながら謝った。

「…たく。」

充滿してた煙りは外に出て行き家の中にはもう煙りはなく、焦げ臭い匂いはもうしなかった。

第4章　　蘭の始動

「ただいま…。」

6時頃になって蘭が探偵事務所に帰って来た。

「おかえり…、蘭。」

事務所の椅子に蘭の父親の毛利小五郎が座っている。小五郎が座っている目の前の机には酒の缶が沢山置かれている。

「あゝ、お父さんまたお酒飲んでる！」

蘭は声を上げながら机に近付いて酒の缶をゴミ箱に捨てた。

「うるせえ。俺は酒が飲みたいんだー。」

小五郎は酔った顔をしながら蘭に言った。

「そんなにお酒が飲みたかったら仕事をしなさい！」

蘭の怒りの声が外にも響きそうだった。小五郎は蘭の怒り声に酔いが少し治まった。

「夕食、作って来る！」

蘭は怒りながら事務所のドアを閉めた。ドアが壊れそうなぐらい思い切りドアを閉めた。蘭はドアを閉めて、自宅に向かう為に階段を昇って行った。小五郎は蘭の怒り声で少しの間、動く事が出来なかった。

「分かりました…。」

目暮はそう言い終えると、電話を切って受話器を置いた。

「目暮警部、さっきの電話千葉県警からですよね？」

警視庁捜査一課の刑事、佐藤美和子が目暮に近付いて来た。

「ああ…。今日、千葉県の公園で益山翔太と言う銀行員が殺されたみたいだ。」

「銀行員…?」

佐藤はその言葉に敏感に反応した。

「話を聞いてた所、こっちで殺された野口雄太さんと同じ手口だと分かった。」

目暮の顔は真剣な表情をしている。目暮と佐藤の会話を捜査一課の刑事達がその話を聞いている。

「連続殺人ですか？」

佐藤の表情が険しい顔に変わった。

「明日、こっちで千葉県警と合同捜査会議を開く事になった。」

目暮の話を自分の席で聞いていた高木は携帯が震えるのに気付き、ポケットから携帯を出した。携帯を開くとメールが来ている事が分

かり、メールボックスを開いた。

「！！！」

高木はそのメールを開いて少し驚いたが、直ぐに何時も表情に戻ってメールを送って来た相手にメールを送り返した。

夜の東京は違った活気が溢れている。夜には朝と違った生活がある。夜を生活する者や楽しむ者やしゃぐ者や悲しむ者も居る。しかし、違った意味で夜に溶け込んでいる人達が居る。夜の都内をこの夜の様な闇に相応しい黒いポルシェが走っている。

「どういう事ですか？組織の人間が殺されたって…。」
ポルシェを運転する男が意味が分からず助手席に座る男に尋ねた。

「そのままの意味だ。」
助手席に座る男は煙草に火を付けた。煙草から出て来る煙りがポルシェの中に広がって行く。この二人は国際犯罪組織…、『黒の組織』の一員。ポルシェを運転しているのがウォッカ、助手席に座るのはジンだ。

「やばいじゃないですかい。組織の情報が警察に…。」
ウォッカの焦った声がポルシェ内に聞こえた。

「警察は問題ねえ。問題なのは我々の人間を殺した奴だ。」
ウォッカとは逆にジンは淡々と話している。

「そいつが組織の情報を掴んでるんですかい？」

「確証はないが…、警察に捕まったらまずい。」

「どうするんですかい？」

ウォッカはポルシェを運転しながら尋ねた。ポルシェの中はジンが吸っている煙草の匂いが充満し始めた。

「もう手は打ってある。」

ジンはポルシェの窓を開けて、吸っていた煙草を窓から捨てた。

第5章　（合同会議）

新一は夕食を食べ終わり、テレビを見ていた。新一の両親、工藤有希子と工藤優作は日本を離れて今はアメリカで住んでいる。新一は今、一人でこの家に住んでいる。しかし、新一は一人ではこの家はもったいない様な感じがしている。テーブルに置かれた新一の携帯が鳴った。新一はテレビから視線を外してテーブルから携帯を取り、電話に出た。

「工藤ですが…。」

『工藤君、目暮だ。』

電話の相手は目暮からだった。

「どうかしたんですか？ また、何か事件ですか？」

新一はテレビを見ながら目暮に尋ねた。テレビでは天気予報士の女性が目暮の天気を説明してる。

『そうなんだ。君に協力して貰いたいんだ。』

「分かりました。」

新一は直ぐに協力をする事を了承した。

『事件の内容は明日、警視庁に来てから…。』

「分かりました。明日、10時頃に警視庁に向かいます。」

『分かった。』

目暮はそう返事をするとう電話を切った。電話が切れた事を確認した

新一は携帯をテーブルに置こうとした。しかし、携帯を持つ手が止まった。

「（蘭にメールしとくか…。）」

新一はそう思い、携帯を開いて蘭にメールを送った。

都内のとある地下駐車場を黒いコートを来た女性が歩いている。その女性が履いているハイヒールの音が駐車場内に響く。その女性の目の前にジンとウォッカが待っているかの様に立っている。その女性は歩くのを止めて立ち止まった。

「私は誰を調べれば良いの？」

その女性はジンの方に視線を向けて尋ねた。

「こいつだ。」

ジンはポケットから写真を出してその女性に渡した。その女性は渡された写真に目を向けた。

「そいつは野口雄太。組織の人間だが、何者かに消されたみてねえだ。」

「この人を…調べれば良いのね。」

その女性はコートのポケットに写真を入れた。

「あと、もう一つだ。そいつを殺した奴を見つけれ、アイリス。」「ジンはその女性に向かってアイリスと言った。彼女もジン達と一緒に組織の一員。」

「警察…動いてるわよね?」

「警察は問題ない。そいつを殺した奴が警察に捕まるのが厄介だ。」「アイリスの質問にジンがさらりと答えた。駐車場には今はこの三人しか居ない。」

「その人を…警察が捕まる前に見つけたら良いのね?」「アイリスが確認する様に尋ねた。」

「ああ…。」

「分かったわ…。」

アイリスはそう言うのと、ジンとウォッカの間を通り抜けてジンとウォッカから離れて行った。

「兄貴、あの女に任せて大丈夫ですかい?」

ウォッカはアイリスの姿が見えなくなると、不安げな声を出した。

「心配するだけ無駄だ。あの女は組織の中でも優秀な人間だ。」

ジンはそう言い終えると、ポルシェが止めてある場所に向かって歩き出した。ウォッカは小走りでジンのあとを追った。

翌日、警視庁で千葉県警との合同捜査会議が開かれた。会議室には警視庁捜査一課の刑事、千葉県警の刑事が集まっている。

「では、これから合同捜査会議を開く。まずは東京で起こった事件から説明してくれ。」
目暮の声で捜査会議が開かれた。

「被害者は野口雄太さん、34歳。杯戸町にある銀行で銀行員として勤めています。」
高木が立ち上がり、報告を始めた。周りの刑事達は高木の話当真剣に聞いている。

「野口雄太さんの死因は腹部を鋭利な刃物で刺された事によります。」
高木は続けて報告した。

「野口さんの昨日の行動は分かったかね？」

「野口さんは昨日、休むと銀行に連絡してます。高木の次に佐藤が立ち上がり報告し始めた。」

「野口さんはマンションを朝早くから出てます。目撃者が居たので確かです。」

「野口さんの死亡推定時刻は分かったかね？」

「はい、野口さんの死亡推定時刻は昨日の朝7時から10時の間で
す。」

佐藤の次に千葉が立ち上がり目暮達に報告を始めた。

「野口さんの財布の中は何も取られてなかったので物取りの犯行ではないと思われます。それと、野口さんの携帯が無くなっていました。」

「なに！それは本当かね？」

「はい、本当です。」

千葉はそう返事をする椅子に座った。

「次は千葉で起こった事件の報告を：。」

目暮がそう言うと、横で腕を組みながら椅子に座っている川奈が閉じていた目を開けた。

「被害者は益山翔太さん、33歳です。千葉で銀行員をしています。目暮の言葉で千葉県警の田神が緊張した表情で報告を始めた。」

「被害者の益山さんも腹部で鋭利な刃物に刺されました。死亡推定時刻は昨日の正午から昼の2時の間です。」

田神は緊張感に堪えながら目暮達に報告をしている。

「益山さんは昨日、急に休むと銀行に連絡してます。益山さんの財布は手を付けられていませんでした。あと、益山さんも携帯が無くなっていました。」

田神はそう言い終えると、椅子に座った。

「携帯の中に犯人に関する何かがあったのかもしれないな。」
川奈が横に居る目暮に言った。

「そうだな…。」

目暮は答えると、椅子から立ち上がった。

「物取りではないと、怨恨の可能性が高い。先ずは野口さんと益山さんの関係、彼等を恨んでた人物を探すんだ。」

目暮の勢いのある言葉で刑事達は椅子から立ち上がって大きく返事をして会議室から一斉に出て行った。

第6章　く捜査へ…く

「えー！あんたの旦那、また事件に出掛けたの。」

園子の声が教室内に響き、教室に居た生徒達は園子と蘭の方を見た。

「園子、声大きい。」

蘭は少し恥ずかしくなり小さな声で園子に言った。

「あ、ごめん。」

園子は周囲を見ながら謝った。

「昨日、目暮警部から事件に協力してくれて言われて今日、警視庁に向かったみたいだよ。」

「はあ、あんたの旦那は事件の方が大事みたいね。」

「ちょっと園子、あんな奴は旦那じゃなくて只の推理オタクよ。」
蘭は新一の文句を園子にぶつけた。園子はからかいのある様な笑顔で蘭を見ていた。

警視庁の玄関ホールで新一は目暮が来るのを待っていた。警視庁には沢山の刑事が出て行ったり、入って来たりしている。新一は慌ただしく動く刑事達は黙って見つめていた。

「工藤君！」

目暮が小走りで新一に近付いて来た。

「目暮警部。」

「遅くなってすまなかった。」

目暮の額には少し汗が出て来ている。

「僕も今来た所ですから。」

新一は目暮にそう言った。

「事件の話は車の中で…。高木君が車の中で待っているから。」

「分かりました。」

新一と目暮は駐車場に向かって歩き出した。

喫茶店の中には数人の客しか居ない。大学生が勉強をしたり、女性の客が読書をしたりしている。店内からは落ち着くような安心するようなメロディーが流れて来る。店の端でアイリスはノートパソコンを開いて何かを調べている。ノートパソコンの画面には野口雄太の顔写真や説明が書かれている。

「（現在は杯戸町の銀行に勤めているのね。）」
アイリスは真剣な眼差しでパソコンの画面を見ている。その横に置かれたコーヒーマシンの香ばしい香りがアイリスの周りに漂っている。

「（現在の銀行に勤め始めたのは…、3年前。）」

「（その前は…。）」
アイリスは画面に映し出されている文字を目で追いながら読んでいく。

「いらっしやいませ。」

喫茶店のドアが開いてマスターがカップを拭きながら言った。アイリスはマスターの言葉に反応して、ドアの方を見た。ドアの前で立つ客がアイリスに気づき、近付いて来た。アイリスはパソコンの電源を切って、鞆にパソコンを入れた。

「ごめんぬ。遅くなって…。」
その女性の客は謝りながら椅子に座った。

「大丈夫よ。」

「お客様、何になさいますか？」

マスターが近付いて来て女性に尋ねた。

「アイスコーヒーを貰える？」

「かしこまりました。」

マスターはそう言い終えると、戻って行った。

「ねえ、聞いた？組織の人間が殺されたって…。」

その女性はマスターが離れて行くのを確認してからアイリスと話し始めた。

「聞いた。」

アイリスはコーヒーが入ったカップを手にとった。

「大変よね。」

その女性はさざりと言った。

「その件で私、動く事になった。」

アイリスはコーヒーを一口飲んだ。

「殺された人を調べるの？」

さっきまで笑顔だった女性の表情が真剣な表情に変わった。

「そう。あと、殺した犯人も見つけろって…、ジンが。」

「その犯人に警察に捕まったら組織の事が分かってしまう分けね。」

「アイスコーヒーです。」

マスターはその女性の前にアイスコーヒーを置き、テーブルから離れて行った。

「舞ちゃん、無理しないでね。」

その女性は不安げな表情でアイリスを見ていた。

「大丈夫よ。心配しないで、由香さん。」

アイリスは目一杯の心配させない言葉を由香に言い放った。

高木が運転する車の助手席に目暮、後部座席には新一が座っている。新一は目暮から事件の話を聞いていた。

「つまり、連続殺人と言う訳ですね？」

「そうだ。殺された野口雄太さんと益山翔太さんは銀行員でその二人が同じ手口で殺された事が分かった。」

助手席に座る目暮が新一に伝えている。

「でも、工藤君が協力してくれたら助かるよ。」

高木は運転しながら笑顔で言った。

「目暮警部、先ずは何処に行くんですか？」

「野口雄太さんが勤めていた銀行だよ。詳しい話を聞きにな。」

目暮と新一の話を聞きながら高木は違う事を考えながら目的の場所を目指した。

第7章 く影の歩みく

新一、目暮、高木は野口雄太が勤めていた銀行に来ている。警察手帳を目暮と高木は見せ、銀行の待合室でソファアに座って待っている。テーブルの上にはお茶が入ったコップが三つ置かれている。待合室で待たされてから5分ぐらい経ってからドアが開いて二人の男性が待合室に入ってきた。

「お待たせしてすみませんでした。」
先に入って来た男性が謝りながら目暮達に近付いた。

「私は野口君の上司の瀬川と言います。」
瀬川はポケットから名刺を出して、目暮、高木、新一の順に名刺を渡して行った。

「こちらは野口君の同僚の山岸です。」

「山岸です。よろしく願います。」
山岸は礼儀正しく頭を下げて挨拶した。

「早速ですが野口雄太さんの事をお尋ねしたいんですが…。」

「なんでも聞いて下さい。彼は優秀な部下でした。」
瀬川は目暮達の向かい側のソファアに座った。山岸も瀬川のあとにソファアに座った。

「野口さんが殺された当日、銀行に休むと電話を掛けてますね。」

「私もそれは聞きました。」

「今まで野口さんが急に休む事はありましたか？」
高木が手帳を開きながら瀬川に尋ねた。

「いえ、そんな事は一度もありません。なあ、山岸君。」

「はい。」

「瀬川さん、この人を見た事はありませんか？」
目暮はポケットから写真を出して瀬川に写真を渡した。瀬川は写真に視線を落とした。瀬川はその写真を数秒見たが…。

「私には見た事ありません。山岸君、君は見た事はあるか？」
瀬川は持っていた写真を山岸に渡した。

「僕も見ただ事はありません。」
山岸は写真を目暮に渡した。

「そうですか…。」
目暮は少し残念そうに写真をポケットに入れた。

「その人は野口君の知り合いですか？」

「益山翔太と言う銀行員です。聞いた事はありませんかな？」
目暮は写真に写ってる人物を瀬川と山岸に言った。

「聞いた事ないな。」

「野口さんのプライベートはどうでした？」
目暮の横に居る新一が口を開いて瀬川に尋ねた。

「私は彼のプライベートは良く知らないよ。」

「僕は一度だけ野口君とお酒を飲みに行きました。」

「その時、野口さんは益山さんの事とか誰かに恨まれてるとか言ってますでしたか？」

山岸の言葉に高木が最初に反応して山岸に尋ねた。

「野口君、その時だいぶお酒を飲んでいて酔ってて変な事を言ってたんです。」

「なんて言ってたんですか？」

「俺は前の銀行で面白い事をしたって…。」

「…という事は野口さんはこの銀行に来る前は違う銀行に勤めていたんですね？」

新一は瀬川達に確認する様に尋ねた。

「確か…、横浜の銀行に勤めていたはず。」

瀬川は天井を見上げながら答えた。

「その場所とか分かりますか？」

「少しお待ち下さい。」

瀬川はそう言い終えると、急いで部屋から出て行った。

横浜のとある小さな公園のベンチで一人の男性がお弁当を食べている。公園には余り人は居ない。小鳥の鳴く声だけが聞こえる。その男性が座るベンチに一人の女性が近付いて来た。男性はそれに気付き、お弁当を食べるのを止めて顔を見上げた。

「今井忠司さん…、ですよね？」

その男性に話し掛けて来たのはアイリスだった。

「はい…、そうですが。」

「野口雄太が殺された事件を調べている刑事なのですが、野口雄太は今井さんと同じ銀行に働いてましたよね？」

アイリスは嘘を説明しながら作り笑顔で尋ねた。

「ええ…。ですが、野口は三年前に辞めて東京の銀行に勤めている筈です…。」

「益山翔太と言う人はご存知ですか？」

アイリスは礼儀正しく今井に尋ねた。

「知ってますよ。野口と同時期に辞めましたし、野口と仲が良かった

たですから。」

今井はお弁当を食べながら答えた。

「どうして野口雄太と益山翔太が辞めたか知りませんか？
アイリスは何かを知る様な瞳をしながら今井に尋ねた。」

第8章 く出会いく

「横浜駅の近くの銀行ですね。」

瀬川と山岸と別れた新一達は野口雄太が勤めていた銀行を出た。

「どうします、警部？」

高木は目暮の判断に任せた。

「そこに行ってみるか。」

目暮は少し考えながら答えた。

「兄貴、アイリスからの連絡で疑わしい奴を見つけたそうですぜ。」
ポルシェの助手席に座るウォッカが笑みを浮かべながらジンに報告した。

「アイリスに伝えろ。そいつの名前と居場所をこっちに連絡しろと。」
「」

「分かりやした…。」
ウォツカはポケットから携帯を出して電話をかけ始めた。

とあるビルから由香が出て来た。由香はビルを出て、何もなかった様に歩いている。由香が歩いていると、一台の車が由香の前で止まった。由香は目の前に止まった車に気付き、車に近付いた。

「こんな所で何してるの？シルフィア。」

由香は助手席のドアを開けて車を運転する男に尋ねた。

「偶然通り掛かっただけ…。」

シルフィアはさらりと答えた。由香は何も言わなかった。

「とにかく乗ったらどうだ？送るよ。」

シルフィアの言葉に由香は黙って答え、車に乗った。由香が乗った事を確認してからシルフィアは車を発進させた。

「君が助けた女性はどうなった？」
シルフィアは運転に集中しながら尋ねた。

「舞ちゃんの事？」

「ああ…。」

シルフィアはさらりと答えた。

「彼女…、ずっと悲しい瞳をしてるわ。」

由香はゆっくり目を閉じて静かに言った。

由香は目を閉じて記憶の中にある数ヶ月前の深夜のある出来事を思い出していた。その日、由香は仕事を終えて急いで家に帰ろうとしていて都内を必死に走っていた。

「（やば！もうこんな時間…、早く帰らなきゃ。）」

由香は自分の腕時計を見ながら走っていた。時計は深夜の1時を指そうしている。

「（明日も仕事があるのに…。）」

深夜の都内を歩いている人は少ない。辺りは真っ暗で店は閉まっている。コンビニには客は居るが数人だけだった。由香が走って居ると、黒いコートを着た女性がとあるビルに入って行った。

「（今の女性、確か組織の人間よね。）」

由香は立ち止まり、その女性の入って行ったビルを見た。

「（このビルで今日、何かあったっけ？）」

由香は首を傾げて考えた。

「（何か嫌な予感がする。）」

由香は何かを感じて黒いコートを着た女性が入ったビルに入ってしまった。

由香は黒いコートを着た女性を追って屋上の前まで来ていた。由香は屋上のドアを少し開けて屋上の様子を見た。屋上には黒いコートを着た女性が立っていた。

「（こんな所で何をするんだろう？）」

由香が考えている時、黒いコートを着た女性はポケットから拳銃を出した。

「（え？拳銃！）」

由香は拳銃を見て目を開く程の驚きを見せた。その女性は拳銃を頭に当てた。

「（まさか…。）」

由香は何かを悟り、屋上のドアを開けた。

「ダメ…！」

由香は叫びながら屋上に出た。屋上に出た瞬間、強い風が由香の体を通り抜けて行った。黒いコートを着た女性はゆっくりと振り向いた。その女性は由香を見ても驚いた表情は見せなかった。由香はゆっくりその女性に近付いた。

「来ないで！」

黒いコートを着た女性が叫んだ。由香はその叫び声に圧倒されて立ち止まった。

「馬鹿な真似はしないで。貴方、組織の人間でしょ？」
由香の言葉にその女性は一瞬、驚いた表情を見せた。

「それがなに？」

その女性は元の表情に戻り由香に尋ねた。

「私も組織の人間なの。」

「…それが何なの？ 邪魔…しないでくれる？」

その女性是由香に背を向けて拳銃を頭に向けた。その女性が引き金を引こうとした瞬間、由香は必死に走ってその女性に近付いて拳銃を取り上げた。

「何するのよ！」

その女性是由香を鋭い眼差しで振り向いた。

「返して！」

その女性是由香が持つて拳銃を取り返そうと由香に怒りの目を向けながら近付いた。

「死にたいなら…、私が殺したあげるわ。」

由香はゆっくり拳銃をその女性に向けた。拳銃を向けられてその女性は一瞬立ち止まった。

「じゃあ…、殺して。」

「分かったわ。」

由香は拳銃の引き金に手を伸ばした。由香は銃口をその女性の頭に向けた。その女性は一瞬目を閉じた。

Bannon…、

一発の銃声が夜の屋上に響いた。銃口からは煙りが空に向かって上がっている。その女性はゆっくり目を開けた。

「どうして！殺してくれないの？」

「貴方、手が震えてたわ。本当は死にたくないんじゃない？」

「馬鹿にしないで！」

その女性の叫び声が響き渡る。二人しか居ない屋上に響き渡った。

「私も死にたいって思った事は何度でもあるわ。」

由香はそう言い終えるとその女性に近付いた。

「貴方も組織の事で死にたいと思ったんでしょう？」

由香に質問にその女性はゆっくりと首を縦に振った。

「私の名前は葛城由香。貴方は？」

「白羽…舞。」

舞はゆっくり口を開いて答えた。舞が由香の顔を見ると優しくそんな笑みを浮かべていた。

「これ、私の携帯の電話番号とメールアドレス。何かあったら連絡頂戴ね。」

由香は舞に電話番号とメールアドレスが書かれた紙を渡して由香は屋上のドアを開けて舞の視界から消えた。

第9章　（行方不明）

新一、目暮、高木は教えて貰った横浜駅の近くの銀行に来ていた。

「…知ってますよ。野口雄太です。」

銀行員の今井忠司は目暮から野口雄太の写真を見ながら答えた。

「野口さんはこの銀行に勤めていたそうですが…。」

「はい。三年前までこの銀行に勤めていました。」

今井は写真を目暮に返ししながら答えた。

「何故、辞めたかは分かりませんか？」

「余り大きな声では言えませんが、三年前にこの銀行で横領事件があったんです。」

今井は辺りを警戒しながら小声で目暮達に伝えた。

「まさか、その横領事件の犯人って…。」

高木が自分の考えを話した。

「あ、いえ…、横領を起こした事件の犯人は野口ではありません。」
今井は高木の言葉をさらりと否定した。

「その犯人は分かったんですか？」

目暮の横に居た新一が話しの間に入り今井に尋ねた。

「緒川照治です。横領が発覚する前に辞めたみたいです。」
今井は少し言いにくいそうな表情をしながら話した。

「その緒川さんは見つかったんですか？」

「いえ…、今も行方不明です。」

今井は残念そうに答えた。

「野口さんはその横領事件が発生した後に辞められたんですか？」

「はい、そうです。確か…、益山も同じ時期に辞めましたよ。」

「益山って…、益山翔太さんの事かね？」

目暮は今井の言葉に敏感に反応した。

「そうですけど…。」

「目暮警部、どうやら横領事件に野口さん益山さんが何かを知ってたかも知れませんね。」

新一は今井に気付かれない様に目暮に話した。

「そうだな…。」

目暮は真剣に聞きながら頷いた。

「今井さん、その横領事件の犯人の緒川照治さんが行きそうな場所とか分かりませんか？」

「さあ、分かりませんね。」

「住所とか分かりませんか？」

高木が付け加える様に今井に尋ねた。

「一応、住所は分かりますけど…、行方不明になってるからそこに居ないと思いますが…。」

「念の為です。」

高木が今井にそう伝えた。

「でも、さっきも同じ事を尋ねて来た刑事が居たな…。」

今井は独り言の様に呟きながら口走った。

「え？ 刑事が此処に来たんですか？」

新一はその言葉を聞き逃さず、今井に尋ねた。

「え、ええ…。今みたいに同じ様な事を…。」

「どんな人か分かりますか？」

「女性でした。美人で若い女性でしたよ。」

「その女性の名前とか知りませんか？」

次に高木が今井に尋ねた。

「いえ…、名前は言ってます。野口雄太の事件を調べてる刑事としか…。」

「それだけですか？」

「はい。」

「……………」

高木はそれ以上は質問せずに黙った。今井は緒川照治の住所を調べ

に行く為に新一達から離れて行った。

新一達が今井と話している頃、アパートの一室のドアが開いてジンとウォッカが部屋に入ってきた。

「此処が緒川照治の部屋ですぜ。」
ウォッカは横に居るジンに言った。ジンは何も答えず、部屋の中を一つ一つ集中しながら見回した。ウォッカもジンの後に続いて部屋を見回した。

「その男、行方不明だったな。」
ジンは近くにあった本を取ってページをめくった。

「三年前に勤めていた銀行で横領事件を起こしたみたいですぜ。」

「警察に捕まる前に逃げた訳か…。」

「あの男を殺したのも緒川って奴ですかね？」

「さあな…。」

ジンは本を閉じて後ろに投げた。本は床に落ちた。

「ずかるぞ。」

「了解。」

ジンがそう言い終えてウオツカが返事をした。

第10章　　く疑わしい目は……

電車に座っていると睡魔が襲ってくる。

その睡魔を我慢しながらアイリスは電車に乗っていた。

電車内はアイリスを入れて8人ぐらいしか居ない。アイリスは椅子に座っている。電車内は静かで、電車の走る音と次の駅を知らせるアナウンスだけが聞こえて来る。アイリスは黒い帽子を被って顔を隠している。睡魔を我慢している時に黒いコートのポケットに入っていた携帯が震えた。アイリスはそれに気付き、コートから携帯を出した。

「（メール……）」

携帯には一件のメールが来ていた。アイリスはメールボックスを開いた。

「（ジン……）」

メールを送って来たのはジンからだった。アイリスは送られて来たメールをじっと見ながら読んだ。その後、直ぐに返事を書いてジンにメールを送り返した。

「警部、鍵を借りて来ました。」

高木が鍵を持ちながら新一と目暮が待っている場所に走って来た。新一達は緒川照治の住んでいたアパートに来ていた。高木は緒川の部屋のドアノブに鍵を差し込みドアを開けた。新一達は部屋の中に入った。

「部屋は行方不明になる前の状態みたいですね。」
新一は部屋の中を見渡しながら答えた。

「行方不明になってから家賃は誰が払ってたんだね？」
目暮は後ろに居る高木に尋ねた。

「管理人の話しだと誰かが払ってたみたいです。」

「そうか…。」

目暮は少し声のトーンが下がった。部屋を一通り見た新一は目暮に近付いて来た。

「どうだね、工藤君？何か分かったかね？」
目暮は何かを期待する様に新一に尋ねた。

「ずっと部屋を使ってませんね。掃除はされて居ませんし、ホコリが溜まっていましたし…。」

「つまり、行方不明になってから一度も帰って来てない訳だな。」
目暮が腕を組みながら答えた。

「たぶんそうでしょう…。それより、気になるのは刑事を名乗った

女性です。」

新一は真剣な表情に変わり、顎に手を乗せながら気になる事を目暮に話した。

「そうだな…。我々と同じ事を尋ねたみたいだから事件の事を調べてるみたいだな。」

「でも、その女性は事件と何か関係があるかも知れません。」

新一はその女性に疑いをかけているに様に言った。

「……………」

新一と目暮の会話を高木が一言も聞き逃さずに聞いていた。

第11章　く捜査と変わらない日常く

高木が運転する車で新一は家まで送ってもらった。新一が家に着いた時にはもう日が沈み、空は夜の空に変わっていた。

「今日はすまなかったな。」

目暮が車の助手席の窓を開けて新一に言った。

「いえ…。また、何か分かったら連絡下さい。」

「分かった。」

目暮がそう言い終えると、車は発車した。新一は車が視界から消えるまですつと見ていた。

「（はあ、疲れた。）」

新一は車が視界から消えたのを確認してから溜息をついた。

「新一君、今帰って来たのかね？」

新一が自分の家の門を開けようとした瞬間、博士の声が聞こえて来た。

「よお博士、買い物に行ってたのか？」

博士の声がする方向を振り向くと博士が重そうな買い物袋を持っていた。重そうな買い物袋を持っている為、博士は疲れた顔をしている。

「そうなんじゃ…。ちよつと家まで持って行ってくれんかね？」

「ああ…、構わねえぜ。」

新一は博士から半分の買い物袋を持った。

「そういえば、今日事件の捜査で学校を休んだみたいじゃな。」

「え？どうしてそれを…？」

「蘭君から聞いたんじゃ。スーパーで蘭君に会ってな。」

「そうか…。」

「あ、そうじゃ！蘭君から預かった物があるんじゃ。」
博士は鍵を取り出しながら大きな声を出した。

「何だよ？預かった物って？」

新一は博士の大きな声に圧倒されながら尋ねた。

「これじゃよ。」

博士はスーパーの袋から文字が書かれた数枚の束になった紙を出して来た。

「今日、休んだ分の授業のノートのコピーじゃよ。」
博士は新一にその束になった紙を渡した。

「蘭に御礼を言わなきゃな。」

新一は渡されたその束になった紙を見つめながら言った。

「そうじゃの…。明日は学校に行くのかね？」

「ああ…。」

翌日、朝早くから警視庁捜査一課では目暮と川奈の両警部が話していた。

「成る程…、行方不明か。その緒川照治が銀行を辞めたのは横領が発覚のを恐れたからか…。」

川奈は渋い顔の表情を変えずに答えた。

「その緒川照治さんが辞めてから野口雄太さんと益山翔太がその銀行を辞めたそうみたいだ。」

「つまり、その二人は横領事件の事で何かを知ってたかも知れないって事だな？」

「その可能性は高い。そして、その二人を殺したのは緒川照治の可能性が高い。」

「行方不明で横領を犯した男か…。そいつを探し出して捕まえる訳か？」

川奈の渋い表情が不気味な笑みを見せた。

「あ、ああ…。川奈警部達は緒川照治の行方を追ってくれ。」
目暮は少し怯えた様な声を出しながら川奈に緒川照治の資料を渡した。

「……………」

川奈はその資料を物凄い威圧な眼差しで見つめていた。

「あ、新一！」

教室に入って来た新一を見つけて蘭は手を振った。新一は手を振る蘭を見つけて鞆を机に置いて蘭が座る席に近付いた。

「ノートのコピー、ありがとな。」

新一は蘭に御礼を言った。

「うん、いいよ。今日は事件の捜査には行かないの？」
新一に御礼を言われて少し照れくさそうに尋ねた。

「ああ…。何か分かったら目暮警部から連絡が来るから…。」

「でも、あんまり休むと出席日数足りなくなるよ。」

「分かってるよ。俺が休んだ時、またコピーを取つといってくれねえか？ 今度、なんかおごるからさ。」

新一はお願いする様に手を合わせて蘭に頼んだ。

「しょうがないわね。」

内心嬉しそうな表情と呆れた表情を見せながら答えた。

第12章 く疑わしい人物く

警視庁の地下駐車場には沢山の車が止まっている。一台の車の中に助手席には川奈、運転席には田神が座っている。

「緒川照治を見つけるんですか？」

助手席に座る川奈に尋ねた。川奈は目暮から渡された資料をじっくり見ている。

「ああ…、その二人を殺した最も疑わしい人物だ。」

「その資料は緒川照治のですか？」

田神は川奈が見ている資料が気になって尋ねた。

「そうだ…。緒川照治は三年前に横領を犯して行方不明になっている。被害者の二人が銀行を辞めたのは横領が発覚してからだ。」

「でも、どうして逃げたんですかね？」

「捕まるのが怖かったただだろう。とにかく、千葉に向かえ。緒川照治は千葉で生まれたからな。」

川奈は資料を後部座席に投げた。

「分かりました！」

田神は勢いのある声を出しながら車のエンジンをかけた。田神はアクセルを踏み、地下駐車場の出口に向かって走って行った。

「……………」

高木は柱に隠れて車が出口に向かって走って行くのをじっと見てい

た。

「行方不明の男、見つかりやすかね？」

ポルシェを運転するウォッカが助手席に座るジンに尋ねた。

「警察が緒川照治の行方を探りだした様だ。」

煙草を吸うジンは冷酷な表情をしている。

「警察が探りだしたらまずいですぜ。」

「警察の動きはアクアビットが監視してるから心配ねえ…。」

ジンの表情は変わる事はなく、煙草から出る煙りを見つめていた。ウォッカは少し不安な顔をしながらポルシェを運転していた。

第13章 〽刑事を名乗る者〽

次の日、学校が休みなので新一は朝から東京で殺された野口雄太の事件現場の路地裏に来ていた。

「（此处が現場か…。）」

新一は辺りを見回した。

「（被害者はこの路地裏に追い詰められた訳か。）」

新一は路地裏の中間ぐらいで立ち止まった。

「………………。」

新一は立ち止まり、事件の事を考えていた。

「（もうちょっと詳しく聞いてみるか。）」

新一はゆっくり歩き出して路地裏から出て行った。

「えー、新一事件現場に行ったの？」

蘭は新一の家の前で博士と話していた。

「そうなんじゃ。朝早く家を出て事件現場に行くって言ったのう。」

「もうすぐテストなのに…。」

蘭が持つてる鞆の中には教科書等が入ってた。

「まあ、直ぐに帰って来るんじゃないかのう。」

博士は笑顔を浮かべながら答えた。

「あれ？工藤君じゃないか。」

新一が警視庁に入ると高木が新一を見つけて近付いて来た。

「高木刑事、目暮警部は居ますか？」

「警部なら捜査に向かったよ。」

高木は笑顔で新一の質問に答えた。

「そうですか…。」

新一は少し残念そうな顔をした。

「よかったら僕が聞こうか？何か用があって来たんじゃないのかい？」

新一の顔を見て高木がそう尋ねた。

「事件の捜査は進んでるんですか？」

「え、ああ…。今、川奈警部達が緒川照治の行方を追ってるけど…まだ見つかってないよ。」

「行方って…？」

「緒川照治は千葉出身なんだよ。もしかしたら、地元以身を隠してるんじゃないかってね。」

「それと、川奈警部が緒川照治の地元友人に話を聞きに行った時、その友人が刑事って名乗る人物に緒川照治の行方は知らないかって聞かれたみたいなんだ。」

高木の表情は陰しくなりながら新一に伝えた。

「まさか、刑事を名乗ってたのは女性ですか？」

「いや、今回は男性だよ。この前、今井さんに刑事を名乗った女性とは仲間だと思うよ。」

「……………」

新一は腕を組みながら黙って何かを考え出した。

「そろそろ、行くから。事件で何か分かったら連絡するよ。」
高木はそう言い終えると、警視庁から出て行った。新一はその様子を黙って見ていた。

「（刑事を名乗る女性と男性は何故、事件の事を調べてるのか？その二人も緒川照治さんを探してる。一体、なんでだ？）」
新一はその場で動かず、黙って考えていた。その間にも刑事達が警視庁を入ったり出たりしている。

「ただいま…。」

蘭は声のトーンを下げながら探偵事務所のドアを開けた。

「なんだ？もう帰って来たのか？」
事務所のドアを開けて中に入ると、小五郎がソファに座ってテレビを見ていた。蘭がテレビの方を見ると、沖野ヨーコのドラマを見ていた。

「（この前も見てたじゃない。）」
蘭は大きな溜息をついた後、事務所のドアを開けて事務所から出て、

上の階にある自宅に向かう階段を昇って行った。

第14章 くひそかな動き

新一と別れた高木は車を運転して都内にある使われていない廃倉庫に来了。この辺りは余人通りは少ない場所になっている。廃倉庫の入口は開いており、高木は車のスピードを下げて倉庫の入口の前に車を止めた。エンジンを切り、高木は車を降りて鍵をかけ、車のキーをポケットに入れて廃倉庫に入って行った。

「遅かったじゃねえか。」

高木が廃倉庫に入るとジンの声が倉庫内に響いた。

「文句を言うなよ。仕事の合間を見て来たんだから。」

高木はジン達が居る場所にゆっくり近付いて行った。

「まあ良いだろう…。アクアビット、警察の動きはどうなってる？」

「今の所は何も進展してない。」

高木の言葉にジンの横に居るウォッカが真剣に聞いている。

「そっちはどうなんだ？ 組織も緒川照治の行方を追ってる様だが…。」

今度は高木がジンに尋ねた。ジンは黙ってウォッカが居る方とは逆の方に視線をちらっと移した。その先には腕を組みながら黙っている美人の女性が居る。彼女はジン達と同じ組織の一員で、ベルモットと呼ばれている。

「その男の行方は分からないわ。」

ベルモットはジンの視線に気付き、高木に答えた。

「あ、そうだ……。今、事件の捜査で工藤新一が捜査に協力している。」
高木が思い出しながらジン達に伝えた。

「（工藤新一……。）」
ベルモットは工藤新一と言葉に反応した。

「（あの子が……。）」
ベルモットは笑みを浮かべながら一年前のニューヨークの事を思い出した。

「工藤新一、高校生で探偵を気取ってるガキか……。」

「今日も警視庁に来たんだ。」

「そんなガキにかまうな。」
ジンはポケットから煙草を出して、煙草に火をつけた。

「分かってる。」

大きな図書館には沢山の人が居る。この図書館は周囲の町では結構大きな図書館である。大きな図書館であって本の数は多く、目的のある本はたいしては置いてある。図書館には若い人から年配の人まで来ている。アイリスは一人一人の姿を見ながら本棚を周り興味のある本を探している。しかし、探し回っても興味のある本はなかった。アイリスは本を諦めて近くにある椅子に座った。

「……………」

図書館の中は静かで、聞こえる音は余りない。アイリスは持っていた鞆からノートパソコンを取り出して机に置いた。

「（組織が探してる人の情報…、調べておいた方が良いわね。）」
アイリスはパソコンを開いて、パソコンの電源を入れた。

「（結局、今日は無駄足だったな。）」
新一が自分の家に着いた時には真っ赤な夕日が空を覆ってた。高木と別れた後、独自で事件の事を調べたが何も分からなかった。新一は疲れた表情で空を見上げた。

「（夕方か…。今日はもう疲れたな。）」
新一はポケットから鍵を取り出して家のドアを開けて家の中に入った。

第15章 く闇で生きるく

夕日が沈んで辺りが夜に変わった頃、街中は会社帰りの人達が歩いている。

会社帰りの人達は社員達と帰りに飲んだり食べたりして、お酒を飲んで酔いながら家に帰ったりする。そんな賑やかな夜の街をアイリスはその様子を見る事もなく、歩いている。歩いていると、アイリスが着てる黒いコートのポケットに入れている携帯が鳴った。アイリスは黒いコートのポケットから携帯を取り出した。

「もしもし…。」

アイリスは電話に出ながら歩き続けている。

『舞ちゃん、由香だけど元気？』

電話の相手は由香からだった。電話の相手が由香からだった事でアイリスの表情が少し和らげた。

「元気です…。」

アイリスは一言だけ答えた。

『良かった。舞ちゃんが元気で…。』

電話越しから由香の元気な声が聞こえて来る。

『今、何処に居るの？』

「今から帰ろうと思ってるところ。」

『今ね…、星を見てるんだ。』

由香が急にアイリスに話し出した。

「星……？」

アイリスは立ち止まり、空を見上げた。空には無数の星が輝いている。

『何時もと変わらない空なのに、何時も何気なく見てなかったけど、急に空を見たくなって見上げたら星の輝く姿が綺麗だったの。』

アイリスは由香の声を聞きながら無数に輝く星をじっと見た。

「本当に……綺麗。」

アイリスは見上げながら答えた。何時も何気なくあると思ってた星を急に立ち止まって見ると、何時もと違う様に見える。

『綺麗だよね。』

「……私はあんな風には輝けない。」

アイリスは俯きながら静かに答えた。その声は車の騒音で消えるぐらいの声で周囲を歩く人々には聞こえてない。

『舞ちゃん、そんな暗い事を考えちゃ駄目。』

「……………」

アイリスは俯いたまま何も答えなかった。

『明日、あの喫茶店で待っててね。』

「ええ……。」

アイリスは一言答えると電話を切った。電話を切り、アイリスは顔を上げて携帯をコートのポケットに入れて、再び歩き出した。

「（私は…闇でしか生きられない。輝きは……。）」
アイリスは星空の先にある輝きを考えず、闇に浮かぶ暗黒の空だけが目に浮かぶ。

第16章 く組織の怖さく

「え、昨日来たのか？」

翌日、新一と蘭は学校に行く為に歩いていた。

「うん。もうすぐテストだから一緒に勉強しようかなって思って…。

」

「そうか…、悪かったな。」

新一はそう言いながら蘭の方を見て謝った。

「新一が悪いんじゃないよ。私が急に来たから…。」

蘭は首を横に振りながら新一に言った。

「…事件、大変みたいなんだね。」

「あ、ああ…。」

新一は曖昧な返事をした。

「でも、もうすぐテストだったんだな。最近、忙しくて忘れてたな。」

」

新一は最近の事を思い出しながらそう答えた。

「事件で忙しかったからね。」

「じゃあ、今日はテスト勉強でもするか？」

新一は笑みを見せながら蘭に尋ねた。

「うん！」

蘭はにっこり笑顔を浮かべて元氣良く答えた。

「いらっしやいませ。」

由香が喫茶店のドアを開けると、店のマスターが声をかけた。由香はアイリスの姿を見つけて、笑顔を浮かべながらアイリスが座るテーブルに近付いた。

「おはよう、舞ちゃん。」

由香はアイリスに挨拶をしながら椅子に座った。

「おはよう…。」

「何になさいますか？」

アイリスが由香に挨拶を終えた直後にマスターが由香に尋ねた。

「アイスコーヒーお願いします。」

「かしこまりました。」

マスターはにっこり笑いながら戻って行った。

「どう？調査は順調？」

「なんとか…、順調。」

アイリスは一口コーヒー飲んでから答えた。

「そっかあ…。」

「由香さんは…、組織で何をしてるんですか？」
アイリスは少し小さな声で尋ねた。

「私は取引とかしてるの。まあ、取引がない時は普通に生活してるけどね。」

「そうなんですか。」

「…こんな事、聞いてはいけないと思うけど…、どうしてあの時…自殺を考えたの？」

「……………」

由香の言葉にアイリスは俯いて黙った。

「ごめんね。変な事を聞いちゃって…。」

「私は…組織が怖い。私は小さい頃から組織に育てられた。両親の姿も見た事がない。」

アイリスは黙っていた口をゆっくり動かして話し出した。

「両親は組織の人間なの？」

「たぶん…、そうだと思う。」

「組織が怖いって…？」

由香は次の質問をアイリスにぶつけた。

「組織は目的の為に人を殺す…。その様子をなんとか見た事がある。悲痛な叫びと怯える声…、助けを求めるうめき声…。」

アイリスは手を震わせながら一度、言葉を止めた。

「夢に…その様子が出て来る。何かを訴えるかの様に…。私はそれが耐えられなかった。闇に染まった自分をこの世から存在を無くす為に…私はあの場所に居たの。」

「舞ちゃんも辛い思いをしてるのね。」

由香は何かを感じ取って優しくアイリスに言った。

「ごめんなさい。変な話で…。」

アイリスは心を落ち着かせながら謝った。

「そんな事ないよ。私だって…舞ちゃんと同じで組織が怖いから…。」

由香は少し悲しげな表情になり俯いた。

「……………」

アイリスは由香の悲しい表情を見て何も言えなかった。

「じゃあ、そろそろ行くね。」

由香は立ち上がり元気な声を出した。その表情は悲しみを我慢している様な表情だった。

「舞ちゃん、今度一緒に遊びに行こう？」

「え？」

アイリスは由香からの誘いに驚いた。今まで誰かに誘われた事がなかったアイリスは返答に困った。

「ダメかな？」

「いいえ。大丈夫です。」

アイリスがそう言うと、由香の表情が嬉しそうな顔に変わった。

「じゃあ、また連絡するね。」

由香は嬉しそうに手を振りながらアイリスから離れて行った。アイリスは少しだけ表情が和らげながら見ていた。

第17章 く焦り……

「緒川照治の行方…、掴めませんね。」

警視庁の廊下を高木と目暮が歩いていた。

「ああ…。川奈警部達の話だと千葉には隠れて居ない可能性がある
るみたいだ。」

目暮は紙コップに入ってるコーヒーを一口飲みながら答えた。

「もしかしたら、もう日本に居ないんじゃないか…。」

「……………」

高木の言葉に目暮は言葉を返さずに黙って歩いている。

「（まずいな…。早く何とか見つけださないと…。）」

高木は内心焦りながら廊下を歩いていた。

由香と別れたアイリスは喫茶店を出て歩いている。交差点を渡り歩いていると、物凄いスピードで一台の車が道を走って来た。その車はアイリスの目の前を横切るとアイリスが歩いている歩道の近くに車を止めた。アイリスは何事もなくその止まった車の横を通り過ぎようとした時、車の窓が開いた。

「ハアイ！アイリス。」車からベルモットの声が聞こえて来た。アイリスは立ち止まり、車に近付いた。車の窓からサングラスをかけたベルモットが笑みを浮かべてアイリスの方を見ている。

「…こんな所で何してるの？」

アイリスは車に近付き、辺りに聞こえない様に小声で尋ねた。

「秘密よ。とにかく、車に乗って。」

アイリスは何も返答せずにベルモットに言われるまま車に乗った。アイリスが車に乗ったのを確認してベルモットは車を発進させた。

「どうして日本に？」

アイリスは車を運転するベルモットに尋ねた。

「ボスの命令でね。」

ベルモットはかけていたサングラスを外し、ポケットに入れた。

「あっちの仕事は大丈夫なの？」

「心配無用よ。休暇で休むって言ってるから…。」

「それで…、私に何か用でも？」

「組織が追ってる男の情報はどうなってる？」
ベルモットの表情が少し真剣な表情に変わった。

「何も分らないわ。」

アイリスは首を横に振りながら答えた。

「もしかしたら…、もう日本には居ないのかも知れない。」

「海外に逃亡されたら探すのに手間がかかるわね。」
ベルモットはそう言いながら車を運転している。

「組織はその人を見つけたらどうするの？」

「消されるわね。組織の人間を殺したんだから…。」

「そうよね…。」

アイリスは小さな声で呟いた。ベルモットはちらっとアイリスの方を見たが、直ぐに前を向いて車の運転に集中した。
組織、警察が緒川照治の行方が全く掴めなかった。しかし、それから三日後…、緒川照治が見つかった。それは、思わぬ形で見つかった。

第18章 〈ダイイングメッセージ〉

堤無津川の河川敷で緒川照治の遺体が見つかった。死因は鋭利な刃物で殺された事だった。警察は野口雄太、益山翔太と同じ殺されたかたなので同一犯の可能性が高かった。

「待っていたぞ、工藤君。」

緒川照治が遺体で見つかったと目暮から連絡があった時、新一は学校を休んで警視庁に向かった。

「緒川照治が遺体で見つかったって本当ですか？」

新一は内心半信半疑で目暮に尋ねた。

「ああ…。それで、君に見てもらいたい物があるんだ。」

目暮は新一にそう言った。

「え？ 緒川照治が見つかったんですかい？」

新一が警視庁で目暮と会ってる頃、組織にも緒川照治の情報が入っ

て来た。都内を黒いポルシェが走っている。

「ああ…、死体となってな。」

ジンはポルシェを運転しながら答えた。

「死体って…？」

「どっかの誰かがその男を殺したみたいだ。」ジンは冷酷な眼差しと真剣な表情をしている。

「これからどうするんですかい？」

「その男を殺した奴を見つけだし、始末する。」

ジンは淡々と答えた。ウォツカはそれ以上、ジンに質問しなかった。

「緒川照治は堤無津川の河川敷で見つかった。」

目暮は新一と部屋に案内して事件の事を話し出した。

「死因は鋭利な刃物で腹部を刺されていた。死亡推定時刻は2、3

日前だよ。」

「2、3日前ですか…。」

新一は腕を組みながら呟いた。

「ポケットに入ってた財布には手をつけられていなかった。」

「そして、気になるのがこれだよ。」

目暮はポケットから一枚の写真を机に置いた。新一は置かれた写真を手に取った。

「数字の『3』が地面に書かれていますね。」
写真には地面に『3』と言う数字が書かれていた。

「それは緒川照治が書いた物だよ。」

「つまりダイイングメッセージって訳ですね。」

「そうだ。どういう意味か分かるかね？」 目暮の質問に新一は黙って首を横に振った。

「そうか…。」

目暮は残念そうに呟いた。

「しかし気になりませんか？ 何故、緒川照治が殺された事を…。」

「確かに一体、誰が緒川照治を…。」
目暮は唸りながら考え出した。新一は目暮から渡された写真をじっと見た。

「この『3』は一体どんなメッセージが…。」

第19章 雨

ジンからの連絡で緒川照治が亡くなった事が分かった。

どうやら殺されたみたいだった。組織は緒川照治の行方から緒川照治を殺した人を見つける事に変更した。組織が提供したマンションにアイリスは住んでいる。家賃等は組織が払い、偽名を使ってマンションを借りている。今日、アイリスはマンションの部屋で緒川照治を殺した犯人の情報をパソコンで探している。

「（先ず、緒川照治の情報を詳しく調べないと。）」

アイリスはパソコンを操作をして緒川照治の事を調べ始めた。アイリスがパソコンで調べ始めた頃、窓から雨の音が聞こえて来た。

「（雨か…。）」
警視庁を出ようとした直後、新一は空を見上げた。空は雨雲が覆いかぶさり、雨の匂いがする。傘を持ってない人は走って移動している。

「（持って来て正解だな。）」
新一は手に持っている傘を開けて傘をさして警視庁を出た。新一はこれからどうするか考えながら雨の中を歩き出した。

「緒川照治が殺されたのなら誰が犯人なのですかね？」

雨の東京の街を車で田神が運転している。雨は段々強くなっていき、視界が少し悪くなった。田神は車の運転に集中しながら助手席に座る川奈の方をちらっと見た。

「警部、何を見てるんですか？」

川奈は何かの資料を見ている。田神は気になり、川奈に尋ねた。

「緒川照治が残した『3』の意味がな。」

川奈は口を開いて田神に答えた。

「犯人の名前でも示してるんですかね？」

田神はダイイングメッセージの意味を考えながら尋ねた。

「まだ分からんが、このダイイングメッセージの意味がこの事件の

犯人の何かを指してる筈だ。」

「犯人の何か…。」

田神が川奈の言葉で考え出した。

「おい、よそ見せずに運転に集中しろ。刑事が事故を起こしたなんて知れたら笑い者だ。」

「はい！」

田神はダイイングメッセージを考えるのは諦め、車の運転に集中をした。

「目暮警部、工藤君は帰ったんですか？」

警視庁捜査一課の部屋に目暮が入って来た。高木は目暮を見つけて目暮に近付いた。

「ああ…、ついさっきな。」

「ダイイングメッセージの事、何か分かりましたか？」

高木は期待しながら目暮に尋ねた。

「いや、分からなかった。」

目暮はそう言い終えると、高木から離れて行った。

「そうですか…。」

高木は残念そうな表情をしながら小さな声で答えた。

第20章　く行動へ…く

「おや、新一君じゃないか。学校はどうしたんじゃない？」

新一が家に近付き出した時、阿笠邸から博士が出て来た。

「事件の事で目暮警部に呼ばれてな。」

新一は家から出て来た博士に近付いた。

「何か進展でもあったのかね？」

「ああ…、まあな。」

新一は素っ気なく答えた。

とある地下駐車場に一台の黒いポルシェが止まっている。ポルシェの運転席にはジン、助手席にはウォッカ、後部座席にはベルモットが座っている。

「何か分かったら報告しろ。」

ジンはそう言い終えると、電話を切った。

「アクアビットは何て言ってたの？」

電話が切れたのを確認してから足を組んでいるベルモットが尋ねた。

「緒川照治を殺した奴の情報が入ってない。」

「残念ね…。」

ベルモットはポケットから煙草を取り出して火をつけた。

「でも、一体誰が…？」

ウォツカは考えながら呟いた。

「…直ぐに殺した奴は見つかる。」

ジンは冷酷な笑みを浮かべた。

「あら、誰がやったか分かってるみたいな言い草ね。」

ベルモットはさらりと言った。

「さあ…。」

ジンは素っ気なく答えてポルシェのエンジンをかけて車を発進した。
ポルシェは地下駐車場から出て行った。

家に帰って来てから新一は緒川照治が残したダイイングメッセージを考えていた。目暮から借りた緒川照治の遺体の写真にはダイイングメッセージの『3』が地面に書かれている。

「(3…、どういう意味だ?)」

新一は顎を手に乗せながらソファーに座っている。テーブルには遺体の写真が置かれている。

「(日にちの事か? 年月か? それとも数の事か?)」

新一は遺体の写真と睨めっこしながら考えていた。

「(あゝ、わかんねえ。)」

新一はソファーに寝転んだ。

「(落ち着け、落ち着け…)」

新一は深呼吸をしてリラックスした。

「(…犯人は何故、緒川照治を殺したんだ? 通り魔の犯行ならダイイングメッセージなんて残さない。犯人は緒川照治の事を知ってる人物。)」

新一はソファーからゆっくり起き上がり再び遺体の写真を見た。

「(緒川照治は三年前から行方不明。つまり、緒川照治の事を知ってるのは行方不明になる前…)」

新一は腕を組んで目を閉じて何かを考え出した。

「（まさか！このダイイングメッセージは…。）」
新一は何かを閃いた瞬間、携帯が鳴った。新一はポケットから携帯を出した。

「はい、もしもし…。」

新一は電話に出て、電話相手に言った。

『新一、私だけど…。』
電話相手は蘭からだった。

「どうしたんだ？」

『今日の授業の内容コピーを取っただけど…。』
蘭からの電話の内容は今日、自分が学校を休んだ分の授業の事だった。

「学校に行った時、渡してくれねえか。」

『じゃあ明日、渡すね。』

「悪い、明日は学校には行けそうにねえんだ。」

『もしかして事件の事？』

「ああ…、でももうすぐ解決するから。」

『じゃあ、早く事件解決してね。』

「ああ…。」

新一はそう言い終わると電話を切った。

「（直ぐに解決させてやるさ。）」
新一は笑みを浮かべながらソファーから立ち上がった。

第21章 く動き出す者達く

翌日、時刻は朝の8時頃…アイリスは組織が提供したマンションを出た。マンションを出るとアイリスの視界に黒いポルシェが入った。アイリスはポルシェに近付いて、何も言わずにポルシェの後部座席側のドアを開けてポルシェに乗った。

「緒川照治の情報を調べてたら…、貴方が言った…人物の名前が出て来た。」

アイリスは鞆からノートパソコンを取り出した。

「やはり出て来たか。」

ジンは煙草に火をつけながら答えた。

「それと、こんな写真が…。」

アイリスはノートパソコンをジンに渡した。助手席に座るウォッカが横からパソコンを覗いた。

「あの男も写ってますぜ。」

ノートパソコンの画面に映る写真には野口雄太、益山翔太、緒川照治、そしてもう一人…。

「こいつがああ男を殺した奴だ。」

ジンは冷酷な眼差しでパソコンに写るもう一人の人物を見た。

「しかし兄貴、何でこいつがああ男を…。」
ウォッカは何故、もう一人の人物が犯人と分かったのかが分からなかった。

「…横領事件。あの横領は緒川照治じゃなくて…その三人が起こした事なんでしょう？」

アイリスはジンからノートパソコンを返して貰い、ジンに確認する様に尋ねた。

「たぶんそうだろう。」

「そいつをどうするんですかい？」

「始末するだけだ。我々の事を知ってる可能性があるからな。」

ジンはポルシェのエンジンをかけながら答えた。

「……………」

ジンの言葉にアイリスは黙って俯いた。

9時30分頃、新一は警視庁で目暮と高木と会っていた。

「工藤君、本当かね？ダイニングメッセージが分かったって…。」

「はい。先ず、あのダイイングメッセージの意味の『3』は人数の事を現していたんです。」

「どういう事だい？ダイイングメッセージの意味が人数って…。」
高木は分けが分からず新一に尋ねた。

「ダイイングメッセージの意味の人数とは横領事件の犯人が3人居ると言うわけです。」

「ちょっと待ってくれ。横領事件の犯人は緒川照治じゃないのかね？」

目暮は話を止めて、新一に尋ねた。

「彼は犯人ではありません。彼は横領事件の犯人達に罪を被せられただけです。」

「でも、緒川照治は三年前から行方不明になってますよ。犯人じゃなきゃ行方不明になる事はないんじゃないんですか？」

高木は疑問に思い新一に尋ねた。

「たぶん彼は犯人の一人に匿われていたんでしょう。『何とかしてやる』とでも言って…。」

「じゃあ、横領事件を起こした3人は誰なんだね？」

「野口雄太、益山翔太です。」

「殺された二人が横領を…！」

高木は驚いた顔をしながら呟いた。

「じゃあ、3人目は誰なんだね？」

「それを調べて欲しいんです。緒川照治、野口雄太、益山翔太の事を調べて下さい。この3人を調べれば犯人の正体が分かります。」

「高木君、直ぐに調べるんだ。」

目暮は大きな声を出して高木に言った。

「分かりました。」

高木は走って部屋から出て行った。

第22章　　く結末の勝利は……

「警部！」

1時間頃してから高木が勢い良くドアを開けて入って来た。

「高木君、何か分かったかね？」

「はい。野口雄太、益山翔太、緒川照治と繋がる人物を見つけました。」

高木は笑顔を浮かべながら答えた。

「誰だったんだね？」

「今井忠司さんです。」

「確か…、その人は緒川照治が行方不明なった事を教えてくれましたよね。」

新一が思い出しながら言った。

「とにかく、今すぐに今井忠司に会いに行くぞ。」

目暮は部屋のドアを開けながら答えた。

11時頃…、横浜港の近くの廃倉庫に今井忠司と黒い帽子を被った人物が居る。辺りには誰も居ない。

「な、何ですか？私に用って…。」

今井は心細い声を出しながら辺りを見回した。

「貴方が犯した秘密…、全部知ってるわよ。」

黒い帽子を被っていたのはベルモットだった。ベルモットの言葉に今井は目を開いて驚いた。

「あら、凶星の用ね。」

ベルモットは今井の方を振り返り、笑みを浮かべた。

「な、何言ってるんですか？」

今井の表情は困惑した顔をしながらベルモットに尋ねた。その時、倉庫の奥からジンが出て来た。

「な、何だ！」

今井は怯えながら後退りを始めた。しかし、今井の後ろにウォッカが不気味な笑みを浮かべながら立っていた。

「運が悪かったみてえだな。貴様があの男を殺さなければこんな事にはならなかったぜ。」

ジンは拳銃をポケットから出して、銃口を今井に向けた。

「あの男って誰だよ？」

「兄貴、こいつしらばくれてますぜ。」

今井の後ろからウォッカの声が聞こえて来た。

「フッ、まあ良いだろう。貴様にはあの世に行ってもらおう。」

ジンは冷酷な笑みを浮かべながら拳銃の引き金に手を伸ばした。今井は辺りを見回して逃げる場所がないか探していた。

「逃げる場所なんてねえぜ。」

ジンはそう言い終えると、拳銃の引き金を引いた。

バン…、

倉庫内に嫌な音が響いた。今井は頭を撃たれて叫ぶこともなく、ゆっくり地面に倒れて行った。ジンは持っている拳銃の銃口からは煙りが出ている。

「死にやしたぜ。」

ウォッカが倒れた今井に近付いて生死の確認をした。

「…ずらかるぞ。」

ジンは拳銃をポケットに入れて、倉庫の出口に向かって歩き出した。ウォッカとベルモットも倉庫の出口に向かって歩き出した。

「なに！今日は銀行に来てない！本当かね？」
今井が勤めていた銀行に新一達が来ていた。

「はい。連絡が取れず無断欠勤をしています。」
女性の銀行員に答えた。

「目暮警部、今井忠司さんの家に行ってみましょう。」

「そうだな。」

新一の提案に目暮は賛同した。

第23章　　（発端へ…）

その後、新一達は今井の家に向かったが今井の姿は見つからなかった。警察は今井の姿を探したが見つからなかった。今井の姿を見つけれられたのは翌日だった。

横浜港の近くの廃倉庫に頭を拳銃で撃たれて死んでいた今井の遺体が見つかった。

その後、今井を殺した犯人を見つけるために警察は動いたが犯人らしき人物は現れなかった。だが、今井が黒い帽子を被った人物と一緒に居る所を見た人は居たが…、その人物が誰だったかは分からなかった。

それから二日後…、

「へえ、じゃあその人を殺した人は分からないんだ。」

新一は蘭に事件の事を話しながら学校に向かっていった。

「ああ…。警察が動いてるみたいだけど…、たぶん見つからないと思う…。」

「どうしてそう思うの？」

「え、いや…。何となくだよ。」

新一は曖昧な返事で答えた。

「ふん…。」

蘭はそれ以上、事件の事は聞かなかった。

「（あの事件には嫌な予感がしたんだ。何かが…、俺の知らない何かが…。）」

新一は立ち止まり、空を見上げた。空は嫌な曇り空が太陽の存在を

消していた。新一はその空を見上げて何か嫌な予感がした。

「新一く、置いてちょうよ。」

蘭の声で新一はまた、歩き出した。

「おう。」

新一は歩くスピードを上げて蘭の横に並んで学校に向かって歩いて行った。

この嫌な予感ハ的中する。それは偶然にも近づいていた。トロピカルランドに蘭と遊びに行った新一はある二人組と出会う。その二人組との出会いが全ての発端…、そして、江戸川コナンの誕生。新一はコナンになり、その二人組が巨大な犯罪組織の一員と知り、その組織を追い始める。その組織を潰すために…。

第24章　大切な人

工藤新一が江戸川コナンになった二日後、アイリスは由香と都内のショッピングセンターを訪れていた。

「舞ちゃんと一緒に買い物するなんて初めてだね。」
由香の両手にはショッピングセンターで買った買い物袋が両手一杯に持っている。

「ちょっと買い過ぎの様な…。」
アイリスは由香が持つてる買い物袋を見ながら言った。

「これぐらいが当たり前よ。舞ちゃんの方が少ないよ。」

「そう…ですか？」
アイリスは自分が持つてる買い物袋を見た。由香よりは買い物袋の数は少なかった。

「それより、お腹空かない？私、お腹ペコペコ。」

「私も…お腹空いた。」

「じゃあ、決まり。この近くに私が知ってるお気に入りのお店があるんだ。そこにしよう。」
由香は嬉しそうに歩き出した。アイリスは黙って由香の後に続いた。

ショッピングセンターを出て、5分ぐらい歩いた所に落ち着きのある店にやって来た。由香とアイリスは店に入った。店に入ると、会社員や学生等がご飯を食べていた。由香とアイリスは店員に案内されて窓側の席に座った。由香とアイリスはメニューから一つを選び、店員に言った。店員は注文をメモして由香とアイリスから離れて行った。

「この店良い所でしょう。私のお気に入りなんだ。」

「良い所…ね。」

アイリスは一言だけ呟いた。

「結局…あの事件で組織の事は警察には知られなかったみたいね。」

由香の表情が少し暗くなった。あの銀行員連続殺人事件の犯人は今井忠司と確定して事件は閉じたが、今井忠司を殺したのが組織の犯行だとは警察も気付かなかった。仮に警察が捜査しても組織の存在には気付かない筈。

「…知られた方が良かったの？」

「そんなんじゃないけど…組織に殺された人は組織の犠牲者にな

ったのよね。」

由香は俯いて表情が見えない。

「組織は…、目的の為にどうして人を殺さなければならぬんですか？」

「私にも分からない。でも、組織は目的の為なら手段を選ばない。」
由香は顔を上げて静かな声で答えた。

「私、死にたいって思った事があるって言ったことがあるでしょう？」

由香は急に話しを変えて、真剣な顔でアイリスを見た。

「え、ええ…。」

アイリスは戸惑った返事をした。

「私の大切な人…、組織に殺されたの。」

「え…？」

アイリスは驚いた顔をした。

第25章 〽処分〽

「ど、どういう事ですか？」

「私の大切な人はね…、組織に刃向かって殺されたの。」
由香は周りの客に聞こえない様に小さな声で話し出した。

「どうしてそんな事を…？」

アイリスは周りを警戒しながら声のトーンを落とした。

「嫌になったのよ。組織に居る事に耐えられなくなって組織を抜けようとしたのよ…。」

「その事が…ばれて殺されたの？」

アイリスの言葉に由香は何も言わず、黙って首を縦に振った。

「由香さんにとって大切な人だったんですね？」

「そう。私も後を追って死のうとしたけど、それじゃダメだと気付いたの。その人の為にも生きなきゃってね。」

由香はにっこり優しい笑みを浮かべた。その笑みには色んな物が詰まってる。アイリスは思った。

「ごめんね。また、こんな暗い話をして…、嫌でしょう？」

「そんな事…ないです。私は由香さんに感謝してる。あの時、由香さんが居なかったら私はこの世に存在してなかったから…。」

アイリスは感謝する気持ちを由香に伝えた。由香はその言葉を聞いて表情が和らいた。

「私も舞ちゃんに感謝してるよ。舞ちゃんに会えて良かった。」
その笑顔にアイリスは心が癒された。今まで見た事のない笑顔が目の前にあった。

「今の電話、ボスからですかい？」

真っ赤な夕日の日差しが黒い車体のポルシェの中に入って来る。黒いポルシェのには似合わない日差しだ。ウォツカはポルシェを運転しながらジンに尋ねた。

「ああ…。あの女の処分が決まった。」

日差しが眩し過ぎてジンは俯き加減になりながら答えた。

「…FBIの鼠を組織に連れ込んだ女。」

「その女って宮野明美の事ですかい？」

ウォツカは確認する様に尋ねた。

「ああ…。」

ジンは素っ気なく答えた。

「…殺すんですかい？」

「あの女を生かして置けば、またFBIの鼠と接触する可能性がある。」

ジンは帽子を深く被り、少し顔を上げた。

「そういえば…、宮野明美に接触して来たFBIの鼠の名前なんて
言いやしたっけ？」

ウォツカはその名前を考えながらジンに尋ねた。

「赤井秀一…奴の名前だ。」

ジンはさらりと答えた。ポルシェは夕日に向かって都内を駆け抜けて行く。夕日は段々沈みかけて行く。闇の輝く夜が直ぐそこまで近付いて来ていた。

第26章　く居心地の悪い場所く

由香と別れてマンションに帰って来たら夜の6時頃だった。アイリスは部屋の電気を付けて、買い物袋をテーブルに置いた。

「（今日も疲れた……。）」

アイリスは溜息をついて椅子に座った。部屋は時計の音だけが響く。それ以外は何の音も聞こえない。

「（静かね……。）」

アイリスは目を閉じて心の中でそう思った。ゆっくりと同じ規則で時計の音が聞こえ続ける。

翌日、アイリスはある場所に来ていた。エレベーターを降りて廊下を歩き出した。

廊下は長く、一番先が見えない。廊下の幅は広く、アイリスが廊下を歩いていると何人かの人とすれ違う。すれ違う人には顔を見た事のある人物もいるが見た事のない人物の顔ともすれ違う。その人物

達は闇に染まり、闇に生きる人物達だ。

アイリスは誰とも顔を合わせず、少し歩くスピードを上げた。廊下を歩き続けて目的の部屋に辿り着いた。アイリスは立ち止まり、部屋のドアを開けて部屋に入った。

部屋の中には本棚やパソコンやテレビ等が置かれている。アイリスは部屋のドアを閉めて、近くの机に鞆を置いた。アイリスは鞆を置いて近くの椅子に座り、パソコンを起動した。

この施設にもう慣れてしまった。最初はどの組織の施設も居心地が悪かった。

「（私も闇に慣れたの：かな？）」

アイリスは自分の両手を見ながら思った。

組織が人を殺して何をしようとしているのか？それが、分からなくてもやってる事は正しい事ではない。それは組織に居る人の中には分かってる者は居る。けど、組織のやり方に反発すればそれは『死』を意味している。だから、組織に居る者達はそれを知ってるから誰も反発はしない。

アイリスがパソコンの画面に視線をやるとメールが来ている事が分かった。アイリスはパソコンを操作をしてメールを開いた。アイリスはメールの内容を見て、直ぐに返信をした。

第27章 必要

アイリスはパソコンでいろんな情報を集めていた。それは全て組織が必要としている情報だ。アイリスが1時間ぐらいこの部屋でパソコンで仕事をしている。その時、部屋のドアが開いて誰かが入って来た。

「…どうだ？」

部屋に入って来たのはジンだった。

「頼まれた情報は此处に…。」

アイリスは振り返る事もなく、パソコンをしている。パソコンの横には資料が置かれている。ジンは近付いてその資料を手にとった。

「流石だな…。」

ジンはその資料を見ながら呟いた。

「ただ、調べただけ…。」

アイリスはさりと答えた。

「お前は組織にとって必要だからな…。」

ジンはそう言い終えると、資料を持って部屋から出て行った。ジンが部屋から出て行ったのを確認してからアイリスはパソコンの操作をしている手を止めた。

『必要』…本当にそう思ってるの？

アイリスはジンが言った言葉に疑問を覚えた。今まで組織の人間に『必要』だと言われた事がなかった。ただ、与えられた仕事を当たり前の様にこなして来た。まだ組織の人間に『必要』だと言われた事がなかった。ただ、与えられた仕事を当たり前の様にこなして来

た。それが、組織で生きる為にやらなければならない事だったから……。けど、ジンが言った言葉は本当なのか？それとも偽りなのか？アイリスは答えを出そうとしたが、見つからない事は分かった。考えるのを諦め、再びパソコン操作を始めた。

それから数日後、組織はある計画を立てた。それは10億円強奪計画……。その仕事を宮野明美に命じた。しかし、それは組織が宮野明美を殺す為の口実の計画だった。そして、宮野明美は組織によって殺された。彼女がその事を知るのは宮野明美が殺された翌日だった。

「宮野明美さんって人が組織に殺されたみたい……ですね？」

宮野明美が組織によって殺された翌日、何時もの喫茶店にアイリスと由香の姿があった。

「FBIの捜査官を組織に潜入させた人だったわよね。それが、どうかしたの？」

由香は紅茶を一口飲んでからアイリスに尋ねた。

「その人の家族も組織の人間なのかな？」

「そうだと思うよ。」

「じゃあ…その人の家族は今、悲しんでると思う。」

アイリスはカップに入ったコーヒーを見た。そのカップに入ってる
コーヒ―はブラック。彼女はその色を見つめていた。今、自分が染
まってる色はこのブラックだと…。

「そうね…。悲しんでるわよね。家族が殺される事は大切な人がこ
の世から居なくなったんだから。」

由香は少し寂しそうで悲しそうな顔をした。アイリスは由香の言葉を
聞きながらブラックコーヒ―に真っ白いクリームを入れた。

第28章　く取引く

東都タワーのネオンが輝きだし、東京の街が夜の世界に入った。

都内のある大きなホテルのロビーの椅子に由香は座っていた。由香の椅子の横にはケースが置いてある。由香はサングラスをかけて新聞を読んでいる。周囲は由香の事を気にする事もなく、ホテルを何時もの日常を送っている。彼女は辺りを警戒しながら誰かを探している。彼女は大きな溜息をつき、時計を見た。

「（そろそろの筈だけど…。）」

由香は時計を見ながら心の中で少し焦りを見せた。その時、由香の視界に一人の男性が入って来た。その男性は黒いケースを持っていた。由香は椅子から立ち上がり、ケースを持ってその男性に近付いた。

「お待ちしてました…。」

由香は軽く頭を下げて挨拶した。

「例の物はちゃんと持って来た。早く金を…。」

ケースを持っている男性は早口になりながら由香に言った。由香はちらっと辺りを見回した。

「此処ではお互いまずいので…、人が余り居ない場所に行きましょう。」

由香は小声でその男性に伝えた。

ホテルを出た由香とケースを持つ男性はホテルから数分離れた所にある人気のない路地にやって来た。

「さあ、早く金を…。」

路地にやって来てケースを持った男性が最初に口を開いた。

「お金はあと…、先ずは例の物を先に…。」

由香はケースを地面に置きながら答えた。

「…分かった。」

ケースを持った男は由香に近付いて持っていたケースを由香に渡した。

「次は金だ…。」

男の言葉を聞いて由香は地面に置いていたケースを手を取った。

「早く！」

バン…、

男の背後から銃声が響いた。数秒後、男はゆっくり地面に倒れて行った。倒れた男の後ろにジンが拳銃を構えて立っていた。

「どういう事？今日の取引のサポートはシルフィアの筈だったわよね。」

由香はケースを持ちながらジンに近付いた。

「シルフィアは急遽違う任務に行った。」

ジンは拳銃をポケットに入れて、煙草を取り出して火をつけた。

「でも、殺す事はなかった筈よ。」

「こいつは組織にとって必要のない人間だ。」

「それより、例の物を渡せ。」

ジンの冷酷な瞳は由香を捕らえていた。由香はこの瞳には逆らえない事は知っていた。由香は何も言わず、ジンにケースを渡した。ジンはケースを受け取り、中身を確認した。由香は黙ってジンの様子を見ていた。中身を確認し終わったジンはケースを閉じた。

「：アイリスと会ってるみてえだな。」

ジンが急に話しを変えて由香に話しかけて来た。

「彼女と会っちゃいけないの？」

由香の言葉にジンは数秒何も言わなかった。

「：妙な真似だけはするな。」

ジンが歩き出したと同時に由香に向かって呟いた。由香は黙ってジ

ンの方を見ていた。

第29章 〈意味の分からない言葉〉

それから5日後…。

「この前は急に悪かったな。」

シルフィアは頭を下げて謝った。シルフィアが謝る先には少し不機嫌そうな由香の顔があった。シルフィアと由香はとあるレストランに来ていた。

「違う任務に行かされたのでしょうか？」

由香はテーブルに置かれたジュースを飲んだ。

「ああ…、命令で。でも、サポートにはジンが来たんだろう？」

ジンと言う言葉を聞いて由香の表情が変わった。

「どうした？何かあったのか？」

シルフィアは由香の表情が変化した事に心配そうな顔をした。

「ジンに舞ちゃんと会ってるのかって尋ねられたの。」

由香はゆっくり口を開いて答えた。

「君はなんて答えたんだ？」

シルフィアはテーブルに置かれている紅茶を一口飲んでから口を開いた。

「会っちゃいけないのって…。」

「それで、ジンはなんて…？」

「妙な真似だけはするなって…。」

「どういう意味なんだ？」

シルフィアは椅子にもたれ掛かって腕を組んだ。

「私が彼女と会う事はいけない事なの？」

「そんな事はない。彼女は君のお陰で元気になり始めたんだろう？」
シルフィアは由香を元気付ける為に言った。由香は何も答えず黙っていた。

由香と別れたレストランを出たシルフィアは街を歩いていた。あの後、由香を元気付けたがシルフィアの心は心配がまだ残っていた。

「（大丈夫かな…。）」

シルフィアは由香と別れずに一緒に帰れば良かったと少し後悔した。

「（けど、ジンは由香になんであんな事を……。）」
シルフィアはジンの言葉の意味が分からなかった。

「（由香が何かをずっと思ってるのか？だが、由香は組織の恐ろしさを知っている。）」

シルフィアは腕を組んで唸りながら考えながら歩いていた。

「（ジン…、あいつは何を考えているんだ？）」
シルフィアにはジンが由香に言った言葉の意味の答えが出せなかった。

第30章 〈恐怖の夢〉

『や、やめてくれ!』

涙を流しながら拒み続ける声…。

『殺さないで…!』

必死に叫びちらす声…。

『うわあああ…。』

血を流しながら悲鳴を上げる声…。

『た、助けて…。』

地面をはいずりながら血を流した人物の顔が近付いて来た。

「ハア…、ハア…、ハア…。」

アイリスは跳び上がるように起き上がった。起き上がると太陽の日差しが瞳に入った。

「（また、あの恐怖の夢…。）」

落ち着きを取り戻したアイリスは外を見上げた。

太陽の日差しはどんな人にも光りを照らす。彼女の両手にも太陽の日差しが照らしている。それは、幸せを与える様に…。

「（太陽なんて：私がどんな風に生きてるなんて：知らない。）」
アイリスは太陽に照らされた両手を見て、太陽に不満な表情を向けた。太陽はその不満な表情を取り除く様にアイリスに光りを注いでいる。

私は逆の世界に生きる住人：、光りなんて何の為にあるの？ 私には手の届く事のない物：。

アイリスは組織の施設の廊下を歩いている。今日、ジンに呼び出されて施設に来ていた。

「（一体：、何かしら？）」

アイリスは呼び出された理由を考えながら廊下を歩き続け、ジンが待つ部屋の前まで来て立ち止まった。ドアをノックをして部屋に入った。部屋の中に入ると、煙草を吸ってるジンが立っていた。アイリスはドアをゆっくりと閉じた。

「私に：、何か用ですか？」

ジンは吸っていた煙草の火を消した。

「組織がある研究をしてる事は知ってるな？」

「APTX4869…ですか？」

アイリスが確認する様に尋ねた。

「もう一つある…。」

「（え…？）」

ジンの言葉にアイリスは驚いた。APTX4869以外にもう一つあるとは聞いてなかったから。それに、APTX4869も組織に居る全員が知ってる訳ではない。

「組織が極秘に進めている研究がある。お前にはその研究データを集めてもらう。」

ジンはそう言う、ポケットからメモリーカードを出した。

「それは…なに？」

アイリスはジンが持つてるメモリーカードを見ながら尋ねた。

「この中に研究に必要な情報が入ってる。」

ジンはメモリーカードをアイリスに渡した。

「その情報を…調べれば必要なデータが見つかるの？」

「ああ…。だが、慎重にやれ。」

ジンはそう言う、部屋から出て行った。

「（慎重に…？）」

アイリスはジンが言った言葉に何か違和感を感じた。変な感じが漂

って来た。アイリスはメモリーカードをポケットに入れて、部屋から出て行った。

第31章 〈メモリーカード〉

組織に施設の地下駐車場に黒いポルシェが止まっている。ポルシェの運転席にはウォッカが座っている。その時、誰かがポルシェに近付いて来た。そして、助手席のドアが開いてジンがポルシェに乗って来た。

「もう終わったんですかい？」

ウォッカはジンがポルシェに乗って来たのを確認してから尋ねた。

「ああ…。」

ジンは素っ気なく答えた。

「しかし、大丈夫ですかい？アイリスにあの研究のデータ集めを任せても…。」

ウォッカは少し不安げな声を上げた。

「問題はねえ…。それに、アイリスに任せる様に命令を出したのはあの方だ。」

ジンは表情を見せずに答えた。ウォッカは『あの方』と言う言葉を聞いて何も言わなかった。組織のボスの命令は絶対、ボスがそう言ったのなら反論する事は出来ない。ウォッカもそれは分かっている。

「…車を出せ。」

ウォッカが考え事をしている時、ジンの声が耳に入ってきた。

「了解。」

ウォッカはポルシェのエンジンをかけて、地下駐車場の出口に向かって車を発進させた。

「（組織が極秘に進めてる研究…、何の研究かな…。）」
アイリスはジンから聞いた極秘に進めてる研究の事を考えながら歩いている。

「（まあ、メモリーカードの中の情報を調べれば何か分かるかも知れない…。）」

アイリスはポケットに入ってるメモリーカードを強く握った。その時、背後から肩を軽く叩かれた。アイリスは立ち止まり振り返った。

「由香さん…。」

振り返るとにっこり笑顔を向けた由香が立っていた。

「舞ちゃんも今日は此処で仕事？」

「いえ…。ジンに呼び出されただけです。」

「じゃあ、仕事とはないんだね。」

由香は少し嬉しそうに口元が緩んだ。

「私、ちょうど仕事が終わったんだけど、舞ちゃんが用事がなかったら遊びに行かない？」

「私は…、構いません。」

「じゃあ、決まり。」

由香はアイリスにウインクをした。アイリスはその表情を見て少しだけ口元が緩んだ。

第32章 海

組織の施設を出てから2時間が経った。アイリスは由香が運転する車の助手席に座っている。窓から外を見ると、車が走ってる場所はビルや電車や車の往来が激しい道や人通りの多い都内ではなく、人通りは少なく、車の往来は全くない辺りは木が沢山立っている森の様な道を走ってる。都会とは違った世界の道を走ってる。

「由香さん、何処に行くんですか？」

アイリスは少し不安げになり、車を運転する由香に尋ねた。

「それは…、着いてからのお楽しみ。」

由香は口笛を吹きながら楽しそうに運転している。車は長く続く森を走って行った。

「舞ちゃん、着いたよ。」

それから30分ぐらい経って由香は車を止めた。

「此処は…。」

アイリスは辺りを見回した。辺りは森の様な場所とは違って青い海が広がっていた。アイリスは車から降りた。車から降りると、潮風と波の音が聞こえる。

「…何か嫌な事や元気がない時に此処に来るのよ。」

由香は車を降りてアイリスの横に並んだ。

「この波の音と潮風が嫌な事とか全部を取り除いてくれる様な気がするの。」

由香の言葉を聞いて、アイリスは目を閉じた。耳から感じるのは潮風と波の音…、それは都会に住んでいる自分には味わえない物。静かで、気持ち良い風が疲れている事や組織の事を忘れてしまう様な気がした。

「舞ちゃんは海に来た事ある？」

由香の声でアイリスは閉じていた目を開けた。

「ない…わ。」

「此処から見える夕日はもっと綺麗だよ。舞ちゃんも見たら綺麗と思うよ。」

由香はアイリスの方を見てにっこり笑顔を見せた。

「見える…かな？」

「絶対に見れるよ。また、二人で見に来よう。」

「ええ…。また、今度。」

由香の真剣な顔を見て、アイリスは嬉しかった。この海をまた、二

人で見たいと思った。

第33章　　幸せは何処に？

「今日はありがとね。付き合ってくれて…。」
マンションに着いた頃にはもう日が落ちて夜になっていた。

「こちらこそありがとうございます。」
アイリスは車を降りながら由香にお礼を言った。

「じゃあ、またね。」
由香はアイリスが降りたのを確認してから車を発進させた。

「（由香さんはいろんな事を知っているのね。）」
アイリスはマンションの入口に向かって歩き出した。今日、初めて『海』と言う物を見た。写真や絵や画像では何度も見た事があったけど、本物を見たのは今日が初めて…。
昔も今も組織の監視は厳しい。

今はある程度、自由には動ける様になった。小さい頃の思い出なんてなかった。両親の姿も顔も知らない。両親が何時亡くなったのかも知らない。小さい頃の記憶は組織の人間に育てられ、学校には行かされていたが、監視付きだった。毎日、自宅と組織の施設と学校だけだった。何処かに出掛けても監視の人間は居た。

「（由香さんには監視が付いてたの…かな？）」
彼女は自分の知らない外の世界を良く知っている。もしかしたら、彼女には監視が付いてなかったのかも知れない。アイリスは考えながらマンションに入って行った。

「（舞ちゃんはあんまり笑顔を見せない。）」
マンションから離れた場所を由香の車が走っている。

「（当然よね…。組織に居る人間に幸せなんてないんだから…。）」
『幸せ』と言う言葉は口では何度でも言える。しかし、手入れる事は難しい。

「（幸せか…。私にとって幸せだったのはあの子が生きていた時だけかな…。）」

記憶に蘇るのは楽しい時間と彼女に笑顔を向ける姿。『幸せ』の実はその時間だけだったのかも知れない。白羽舞の自殺を止めた時、彼女の姿を見て『幸せ』なんて知らない顔をしていた。何故、自分は彼女の自殺を止めたのか？彼女にとっては生き続ける事が嫌だった筈。どうして自分は彼女の自殺を止めたのか？それを考えていると、あの子の表情が映像として現れる。

「（やっぱり…。何処か似ている感じがする。）」
舞の表情とあの子の表情が由香の記憶に浮かぶ。辛い時間を生きて来た彼女に『幸せ』と見つけて欲しい。由香は心の中で願い続けた。

「（舞ちゃんには…。笑顔でいて欲しい。）」

第34章 不安

翌日、アイリスは朝起きてからパソコンを開いていた。少し眠そうな顔をして机にコーヒーが入ったカップと携帯電話が置かれている。

「（何これ…？）」

昨日、ジンから渡されたメモリーカードの情報をパソコンで調べているアイリスはその情報に驚いた。メモリーカードの中の情報は世界にある研究所の名前、そこでどんな研究をしているのかが書かれていた。しかも、その研究所の名前には政府が極秘に進めている研究所の名前も何個か見つけた。その情報を見て、アイリスの眠気が覚めた。

「（まさか…、此処からデータを集めるき？）」

アイリスは自分に問い掛けた。しかし、問い掛けても答えが出るわけでもない。

『慎重にやれ…。』

アイリスが考えていると、昨日ジンが去り際に言った言葉を思い出した。

「（まさか…。）」

アイリスは言葉の意味が分かり、テーブルに置かれた携帯を素早く取って急いで何処かに電話をかけた。

『どうした？』

数回コール音してから電話相手が電話に出た。アイリスが電話をかけた相手はジンだった。

「…聞きたい事があるの?」

『何だ?』

「貴方から渡されたメモリーカード…、世界各国の研究所の情報が入ってたけど…どういう意味?」電話をするアイリスの表情は少し不機嫌な顔をしている。

『意味などない。メモリーカードに入ってる通りだ。』

受話器からジンの感情のない冷たい声がアイリスの耳に入ってくる。

「私に…、この研究所で研究してるデータを盗めって事?」

アイリスの声がさっきより大きくなった。

『…そうだ。メモリーカードに入ってる研究所には組織が極秘に進めてる研究に必要なデータがある。』

「メモリーカードに入ってる研究所には…政府が所有する研究所もある。もし、失敗したら世界に組織の事がばれるわよね?」

『だから、言っただろ? 慎重にやれ…と。』

「…断ったら?」

アイリスは恐る恐るジンに尋ねた。

『これはあの方の命令だ。断る事は出来ねえよ。』

ジンから返ってくる答えは何処かで分かっていたかも知れない。断る事が出来ないならやるしかない。断ったら何が待ってるのか知ってるからだ。

「分かったわい。」

アイリスは少し間を空けてから答え、電話を切った。電話を切り、携帯電話を机に置いた。アイリスは窓の方に視線を移した。窓から見える空は太陽を覆い隠して今にも雨が降りそうな天気だった。アイリスは空を見て、少し不安な顔をした。

それから数週間後、組織内部である事件が起きた。

第35章　　脱走

「どうだ？あの女は見つかったか？」

路上に駐車している黒いポルシェにもたれ掛かりながらジンは煙草を吸いながら誰かと電話をしている。

『まだ、見つかりやせん。』

ジンが電話をしているのはウォツカだった。

「あの女が脱走としてから時間は余り経ってない。近くに居る筈だ、探せ。」

『分かりやした。』

ウォツカはそう言い終えると、電話を切った。受話器からは電話が切れた音が聞こえて来るだけだ。ジンは携帯をポケットに入れた。

「（あの女…、どうやってあそこから抜け出したんだ？）」

ジンは吸っていた煙草を地面に落とし、靴で火を消した。そして、ポルシェに乗り込んで車を発進させた。

組織内部で事件が起きた事を私が知ったのは翌日だった。シェリーと言う組織の人間が脱走した事が分かった。シェリーは組織の中でも優秀な科学者でAPT4869の責任者だ。アイリスはシェリーの脱走の事を考えながら街を歩いている。

「(脱走…ね。)」

組織から脱走する者は今まで何人も居た。

しかし、脱走する者は組織の裏切り者として殺されて来た。

組織を脱走する者は理由があって脱走しようとした。シェリーも理由があって組織を脱走した。彼女の姉、宮野明美はこの前組織によって殺された。シェリーが脱走したのは姉が殺された事だろう。しかし、組織は彼女を探し出して殺される。組織を脱走しても組織は執拗に彼女を追う。逃げる事なんて出来ない。

「組織は必死にシェリーの探している。」
とある喫茶店に由香とシルフィアが居る。

「：見つかったら殺されるわよね？」

由香は俯きながらシルフィアに尋ねた。コーヒーが入ったカップに由香の顔が映っている。

「ああ：、組織を裏切ったからな。」

シルフィアはテーブルに置かれたカップを手に取り、コーヒーを一口飲んだ。

「組織から：逃げたい。」

由香は静かにぽつりと言った。

「なに言ってるんだ？」

「彼女は組織から逃げれたのよ。だったら：。」

「：無理だ。シェリーが脱走した事で組織は警戒をしている。脱走なんて無理だ。」

シルフィアの声のトーンが大きくなり、静かな喫茶店に響いた。喫茶店に居た客達は由香とシルフィアの方に振り向いた。

「警戒とかそんな問題じゃない。私はもう嫌なの。組織に居るのが：。」

由香の瞳には涙が浮かんでいた。

「ねえ、シルフィアなら分かるでしょう？私の気持ちが：。」

由香は顔を上げてシルフィアの方を見た。由香は悲しく笑みを浮かべながら見ていた。

「……………」

シルフィアは何も答える事が出来なかった。

第35章　く脱走く（後書き）

お久しぶりです、紅佐洲仮です。

『影の世界』が35章まで来ました。35章からシェリーが脱走します。

この話しはアイリスが組織を裏切るまで書きます。

どれぐらい続くかは分かりませんが、これからもよろしく願います。

第36章 約束

テーブルに置かれた二つのコーヒーカップはまだ温かそうだった。シルフィアはカップを手に取り、カップに入ったコーヒーを一口飲んだ。

「（ぬるいな…。）」

飲んでみると、コーヒーは少しぬるくなっていた。シルフィアはカップをテーブルに置いて、もう一つのカップを見た。カップの中にはまだ、コーヒーが半分ぐらい残っている。しかし、シルフィアの前に居た由香の姿はなかった。

『ねえ、シルフィアなら分かるでしょう？ 私の気持ちが…。』

シルフィアはさっき由香が言った言葉を思い出した。

『お前の気持ち分かってる。お前がどんな気持ちで生きて来たのかも…。』

『だったら、分かるでしょう？』

由香の真剣さはシルフィアにも伝わって来る。彼女が組織を恨んでる事も分かっている。

『分かるけど…、駄目だ。』

『どうして駄目なの。』

『…由香、聞いてくれ。組織を壊滅させてくれる人物は必ず現れる。それまで、待つんだ。』

シルフィアの瞳は真剣で必死だった。

『そんなの何時まで待てば良いの！明日、明後日、一週間後、それとも一年？』

由香は声を上げながら急に椅子から立ち上がった。喫茶店に居た客達は立ち上がった由香の方に視線を向けた。

『それは…、分からない。』

『何時になったらそんな事が起きるのよ！』

由香は涙を流しながら走って喫茶店から出て行った。

「（お前の抱えている気持ち、痛いほど分かってる。俺だって…、出来るなら組織から逃げたい。）」

シルフィアはさっきの由香とのやり取りを思い出しながらまた、コーヒーを一口飲んだ。コーヒーはさっきよりぬるくなっていた。

「（けど、約束したんだ。お前も守るって…。）」

シルフィアはコーヒーが入ったカップを強く握った。

「…三日が経ちやしたが見つかりやせん。何処に逃げたんですかね？」

シェリーが脱走して三日が経った。組織はシェリーの行方すら掴めなかった。

「三日も経って見つからねえって事は何処かに姿をくらましたって事だ。」

ポルシェを運転するジンが淡々とウォツカの質問に答えた。

「姿をくらまされたらまずいですぜ。シェリーが警察に組織の事を話したら、組織の存在が世間に…。」
冷静な表情をしているジンとは逆にウォツカは不安な表情をしている。

「その事は問題ねえ。シェリーが脱走した事はあの方の耳にも入ってる。」

「それに、シェリーの行方は組織が追っている。」

ジンは冷酷な笑みを浮かべた。

「…見つかりやすかね？」

「時期にな…。」

ジンはアクセルを強く踏み、ポルシェは段々スピードを上げて街中を走り抜けて行った。

第37章 く元気のない声く

シェリーが脱走してから一週間が経った。アイリスはマンションの部屋で相変わらずパソコンをしている。彼女がパソコンに集中していると、机に置いてある携帯がなった。彼女はパソコンを操作する手を止めて、机に置いてある携帯を取った。

「はい…、もしもし。」

アイリスは携帯を取り、電話に出た。

『私、由香だけど…。』

電話の相手は由香からだった。しかし、受話器から聞こえて来た由香の声は何時もの元気な声ではなかった。

「由香さん…、どうしたの？」

アイリスは由香の様子がおかしい事に心配になり、由香に尋ねた。

『今から…、舞ちゃんの家に行っていていい？』

「いいよ…。」

『じゃあ、後でね…。』

由香はそう言い終えると、電話が切れた。アイリスは電話が切れても携帯を見つめていた。何時も元気な由香が元気ではなかった事にアイリスは少し心配していた。

「（シェリーが脱走したか…。）」
警視庁の廊下を高木がシェリーの脱走の件の事を考えながら歩いていた。

『シェリーが脱走した…。』

高木はシェリーが脱走した直後、小田切刑事部長とひそかに会っていた。何故、高木が小田切と会ったのか？それは彼こそが組織のボスだからだ。犯罪組織のボスが警視庁の刑事部長だとは誰も思わないだろう。

『一体、どうやって？』

高木は小田切の言葉に驚いた。組織から脱走に成功する事が出来るとは思っていなかった。

『さあ、どうやって逃げ出したかは私には分からん。』

小田切は首を横に振りながら冷静な顔をしている。

『今、シェリーの行方を追っているが…直ぐには見つからんだろう。』

」

『シェリーの口から組織の事が漏れたら…、まずいですね。』

『まあ、そうなっても誰がその組織のリーダーなんて分からない。』
小田切は自信満々の笑みを浮かべた。

『シェリーを見つけたら報告をしてくれ…、アクアビット。』

『見つけたら…、もちろん始末ですよね？』

『ああ…、もちろんだ。』

小田切は高木の質問に対し、当たり前のように答えた。

「（しかし、気になる。シェリーはどうやって逃げたんだ。）」

高木は考え続けながら廊下を歩いていると、誰かが走って高木に近付いて来た。

「高木君。」

高木の目の前に佐藤が走って来た。

「どうしたんですか？佐藤さん。」

高木は考えるのを止めて、走って来た佐藤に尋ねた。

「殺人事件だから直ぐに来て。」

佐藤の言葉で高木は刑事の顔に戻り、警視庁の廊下を走り出した。

第38章　く生きる希望く

ピンポーン……

マンションの部屋のインターホンが鳴った。アイリスは部屋のドアを開けた。

「舞ちゃん、遊びに来たよ。」

ドアを開けると由香の元気な声が聞こえて来た。先程、由香からの電話では由香の声が何時もより元気がなかった。アイリスは由香の元気な声が聞けて少し安心した。

「さっきねケーキ買ってきたんだ。舞ちゃんの分もあるから食べよう。」

由香は手に持っていたケーキが入った箱を見せながら部屋に入って行った。

アイリスは紅茶が入ったカップを二つを持ちながらテーブルに近付いた。

「由香さん、どうぞ。」

紅茶が入ったカップをテーブルに置いた。テーブルには由香が買ってきてくれたケーキが二つ置かれている。

「ありがとう。」

由香はアイリスからカップを受け取り、紅茶を一口飲んだ。

「ケーキ、頂きます：ね。」

アイリスは座り、ケーキを一口食べた。

「美味しい：。」

アイリスは小さな声で呟いた。

「：舞ちゃんは組織から逃げたいって思った事ある？」

由香はカップをテーブルに置き、真剣な表情に変わった。アイリスは由香の方に視線を向けた。由香の瞳は何時もの優しい瞳ではなく、真剣で少し悲しそうな瞳だった。

「私は：自殺しようとした。組織の恐怖から逃げれるのは死ぬしかないと思ってた。」

アイリスは静かに口を開いた。部屋の中は物静かで、時間が進んでいるのかも分からない。

「それが、組織から逃れれる方法だと思った。」

「そっかあ：。」

由香は静かに一言そう答えた。

「でもあの時、自殺を考えてなければ由香さんに会えなかった。」

「え?」

アイリスの言葉に由香は少し驚いた。

「由香さんに会う前までは何の為に生きてるのか分からなかった。でも、由香さんに会えて生きてる事に楽しみを覚えたのは初めてです。」

「ありがとう、由香さん。私に生きる希望をくれて。」

アイリスは頭を下げて由香に御礼を言った。

「(生きる希望...)」

由香はアイリスの言葉を聞いて瞳を閉じた。

第39章　　く拳銃く

それから6日が経った頃、ジンから突然連絡があった。

『アイリス、今日はシルフィアとある人物の監視をしろ。』

『ある人物って…？』

『それはシルフィアに伝えてある。お前はシルフィアと合流してその日の監視だ。』

その連絡を元にアイリスは都内の駅前でシルフィアが来るのを待っていた。最近は段々と寒くなり、暖かい場所から出たくない季節に近づいて来ていた。アイリスは寒さを感じながらシルフィアが来るのを待っていた。その時、一台の車がアイリスに近付いて来た。その車はアイリスの目の前に止まった。運転席のドアが開いてシルフィアが出て来た。

「アイリスだね…？」

シルフィアはアイリスに確認する様に尋ねた。

「え、ええ…。貴方がシルフィア？」

「ああ…。とにかく、乗って。」

シルフィアはそう言い終えると、車に乗った。アイリスは助手席側の扉を開けて車に乗った。シルフィアはアイリスが車に乗ったのを確認してから車を発進させた。

「監視する人物は神崎政行。こっちに金を流してた男だ。」
車を発進させて数分ぐらい経ってからシルフィアが口を開いた。

「その…、神崎政行をどうして監視するんですか？」

「神崎は明日、組織が始末する事になっている。俺達は神崎が変な事をしない様に見張る訳だ。」

アイリスの質問にシルフィアは淡々と答えた。シルフィアの話しだと神崎政行は組織に金を流していた。始末するという事は組織にとってもう必要が無くなったって事だ。

「これを渡しておくよ。」

シルフィアはポケットから拳銃を出して、アイリスに渡した。

「拳銃…。」

渡された拳銃を見てアイリスがぼつりと答えた。

「もし、神崎が変な真似をしたら始末しろと命令されたからな。」

「そうですか…。」

手に持つ拳銃は重く感じた。今まで、何度か持つ事はあった。しかし、拳銃を持ったびに何か恐怖を感じた。こんな物で人は簡単に人を殺してしまう。人を殺す人達は何を思っただろう？後悔とかはないのだろうか？アイリスが拳銃を持ちながら考えていた。

「大丈夫。もし、始末する事になっても君には撃たせないよ。」
シルフィアはアイリスに心配させない様に言った。

「……………」

アイリスは何も答えず、拳銃をポケットに入れた。拳銃をポケットに入れた途端、シルフィアは車を道路の端に止めた。

「さあ、着いたよ。」

シルフィアは車を止めてアイリスに伝えた。

第40章 〽尾行〽

「さあ、着いたよ。」

シルフィアは車を止めながら言った。アイリスは辺りを見回した。

「神崎政行って人は何処に居るんですか？」

アイリスは神崎政行の姿を見つける為に辺りを見回した。

「あそこだよ。」

シルフィアは指先である場所を指した。シルフィアが指す場所はレストランだった。

「レストラン…？」

「神崎はこの時間帯にあのレストランに居るんだ。どうやら、あのレストランはお気に入りみたいなんだ。」

「そうなの…。」

アイリスは素っ気なく答えた。シルフィアはずっとレストランの方を見ている。

それから1時間ぐらいしてから一台の車がレストランから出て来た。

「やっと動いたか…。」

シルフィアはレストランから出て来た車見て笑みを浮かべた。シルフィアはその車をあとを追うように車を発進させた。アイリスは前を走る車を見た。白い車が目の前を走っている。あの車を運転している人は明日、自分が殺されるとは夢にも思っていないだろう。

「その神崎は組織にどれぐらいお金を渡していたの？」

「結構な数字だ。2億は確実に越えてるな。」

シルフィアが口走った2億と言う言葉にアイリスは呆れそうになった。神崎は組織に2億以上渡していたのに必要が無くなったら殺す。それは組織のやり方…。もし、神崎が組織と関わりを持っていないかったら殺される事はなく、普通に生活をしていただろう。

前の車を尾行してから45分が経った頃、前の車は家の駐車場に車を止めた。

「此処は神崎の家だ。」

シルフィアは気付かれないように車を止めた。窓からその家を見ると、豪華な家がそこに立っていた。金儲けしている人間が住みそうな家だとアイリスは心の中で思った。辺りを見渡すと高級住宅が数件立っていた。

「これからどうするの？」

「此処で監視、面倒くさいけどな。」

シルフィアは大きな欠伸をしながら答えた。

「そうですか…。」

アイリスはそう答えると、神崎が入って行った家の方を見た。

とあるレストランで由香は昼食を食べていた。テーブルにはコーヒ―とサンドイッチが置かれていた。しかし、そのサンドイッチには手を付けていなかった。

『ありがとう、由香さん。私に生きる希望をくれて。』
この前、アイリスに言われた言葉を思い出していた。

「（生きる希望か……。）」

「（あの子も希望を信じてて組織を裏切ろうとしたのかな？）」
由香は何かを考えながらテーブルに置かれたコーヒ―が入ったカップを手に取り、コーヒ―を一口飲んだ。

第41章 く悲しい目く

車の助手席に座るアイリスは携帯で誰かにメールを送っていた。

「誰かにメールでも送ってるのか？」

突然、シルフィアがアイリスに尋ねて来た。

「ちょっと知り合いに…。」

アイリスはそう言い終えると、携帯を閉じてポケットに携帯を入れた。

「…今、組織に居てどう思う？」

「え…？」

シルフィアから思いもよらぬ質問が聞こえて来た。

「どうして…、そんな事を聞くのですか？」

何故、シルフィアが自分にそんな事を聞いて来る理由が分からなかった。

「なんとなく…。」

シルフィアは笑みを見せながら答えた。

「さあ、そろそろ帰るか。」

シルフィアは時計を見ながら答えた。

「え？監視は…？」

アイリスは少し戸惑いながらシルフィアに尋ねた。

「もう動く様子もないし、長く居たら逆に怪しまれるだろう？」

「…そうですね。」

アイリスは少し間を開けてから答えた。アイリスがそう答えると、シルフィアは車を発進させた。

アイリスが住むマンションの目の前でシルフィアは車を止めた。

「今日はお疲れ…。」

「お疲れ様です。」

アイリスは車のドアを開けて車から降りた。シルフィアはアイリスが車から降りたのを確認してから車を発進させた。

「（あの人から…、組織の冷酷なオーラが感じなかった。）」

アイリスは視界から消えるまでシルフィアが運転する車を見ている。

「（それに…、悲しそうな目をしていた。）」

車が視界から消えて、アイリスはマンションの入口に向かって歩き

出した。

その翌日、神崎政行は予定通りに組織によって殺された…。

それから一ヶ月の月日が流れた。アイリスは用事の為に組織の施設を訪れていた。

「ハアイ、アイリス。」

組織の施設の廊下を歩いていると、背後から声が聞こえて来た。その声には聞き覚えのある声だった。アイリスは声のする方を振り向いた。そこにはベルモットが立っていた。

「久しぶりね、アイリス。」

「どうしてこの施設に？」

アイリスはベルモットがこの場所に居る事に疑問に思った。

「ちょっと調べたい事があってね。」

ベルモットは笑みを浮かべながら質問に答えた。

「そういえば、三日前にピスコが亡くなったみたいね？」

ピスコが杯戸シティホテルで亡くなった事は組織の内部にも伝わっている情報だ。ピスコはある人物を暗殺する為にそのホテルに来ていた。ベルモットはサポートする為にそのホテルに同行していた。

「まあ、死んで当然の男よ。犯行を写真で撮られたんだから…。」
ベルモットはそう言い終えると、アイリスの横を通り抜けて行った。

第42章 〈廃墟化の建物〉

「そう…。舞ちゃんに会ったの…。」

車の助手席に窓から外を見ながら由香がぽつりと答えた。

「ああ…。この前の任務でな。」

シルフィアは車を運転しながら言った。街を歩く人達は楽しそうにしたり、笑いあったり、冗談などを言ったりしている。そんな様子を由香は羨ましく街を歩く人達は見ている。しかし今、自分にはそんな楽しい会話など出来なかった。車の中は重苦しい空気が流れている。

「それで、舞ちゃんに会ってどうだった？」

由香は窓から視線を外し、シルフィアを方に視線を移した。

「どこか悲しい表情だったよ。」

シルフィアは表情を変えずに答えた。

「…この前、舞ちゃんに言われたの。生きる希望をくれてありがとうって…。」

「私、今までそんなこと言われた事がなかった。あの子が殺された時は絶望感しかなかった。でも、今は絶望感なんて忘れていた。」
由香はシルフィアから視線を外して正面を向いた。

「良かったじゃないか。妹さんが亡くなった時、お前は元気がなくて死のうとしたじゃないか。あの頃より、今のお前は幸せそうだ。」

「私が…幸せそうに？」

由香は少し驚きながら首を傾げた。今まで、そんな事に気付かなかった。自分が幸せそうに見えるなんて…。

「彼女は由香によって救われた。君も彼女によって救われたって事だ。彼女は由香の事を信じてるんだからな。」

シルフィアは優しくそんな笑顔を見せた。由香はシルフィアの笑顔を見て、彼女も少し笑みを浮かべた。

「ねえシルフィア、この前はごめんね。取り乱して…。」

「気にするな。」

シルフィアはさらりと答えた。

「ありがとう…。」

由香はシルフィアに聞こえない様に小さな声で呟いた。由香の表情は穏やかだった。

森が覆いしげる場所に廃墟化した建物が立っている。その場所は森に囲まれており、近付いてみないとそこに建物があるかも分からない

い。その建物の目の前に黒のポルシェが止まっていた。錆び付いた建物の門は開いていた。門には『立入禁止』の札が付けられていた。その札はごく最近に付けられたものではなかった。何年も前に付けられたものだった。

「…見つかったか？」

建物の内部は当時のままの状態になっており、さっきまで使われていたような錯覚を起こす様だった。

「まだ、見つかりやせん。」

ウォツカはテーブルに放置された資料を確認しながら答えた。

「あっちの方も捜してきやす。」

ウォツカは小走りで建物の奥に消えて行った。ウォツカが消えても走る靴の音だけが建物の内に響いた。ジンは煙草に火を付けて、さっきウォツカが見ていた資料を手にとった。手にとった資料を一枚、一枚見ていく。資料は研究実験の結果が書かれており、全てが『失敗』と書かれていた。

「（失敗だらけの研究か…。）」

ジンは資料を読み終えると資料を投げた。資料は辺りに散りばめられた。

第43章 変わらない時間へ……

「兄貴、見つかりやしたぜ。」

20分ぐらいしてウォッカが資料を持ちながらジンが居る場所に走って戻って来た。

「これです…。」

ウォッカはジンに資料を渡した。ジンは渡された資料に目を通していく。

「ボスはその資料をどうするんですかい？」

「研究に必要な資料みてえだ…。あいつの話しだとな。」

ジンは資料を持ちながら建物の出口に向かって歩き出した。

「あいつって誰ですかい？」

ウォッカはジンに付いて行きながら建物の出口に向かって歩き出した。

「…ゼロだ。」

ジンはさらりと答えた。

「ゼロ？そんなコードネームの奴、組織に居るんですかい？」

ウォッカは聞き慣れないコードネームを聞いて、ジンに尋ねた。

「ゼロはコードネームじゃねえ…。」

「え？…どういう事ですかい？」

ウォッカはジンの言葉にますます分からなくなった。

「奴にはまだコードネームが付いてない。ゼロはコードネームのない奴に組織が勝手に付けた名前だ。」
ジンがそう言い終わると、建物の出口のドアが見えて来た。ジンとウォッカはドアを開けて建物から出て行った。

それから六日が経った頃…

「舞ちゃん、こっちこっち。」

喫茶店に入ると由香の声が静かな店内では大きく聞こえた。アイリスが声のする方を見ると、由香が元気よく手を振っていた。

「こんにちは、由香さん。」

アイリスは由香が居るテーブルに近付いて椅子に座った。アイリスが座ると、店員がやって来た。彼女はコーヒーを注文すると店員は戻って行った。

「由香さん、元気になったんですね…。」

「え…?」

アイリスが思いがけない言葉に由香は少し驚いた顔をした。

「最近、由香さん元気がなかったから心配してたんです。」

「…ありがとう、心配してくれて。」

由香は少し間をあけてから答えた。

「もう大丈夫だから。」

由香は優しい笑顔でアイリスを見た。アイリスは由香の表情を見て、何時もの由香に戻った事が分かり、少し口元が緩んだ。

「ねえ舞ちゃん、今から買い物に行こう。」

「ええ…。」

アイリスが了承すると由香は立ち上がり、少し駆け足でレジに向かって行った。

第43章 変わらない時間へ…（後書き）

こんにちは紅佐洲仮です。

今回、出て来た名前：『ゼロ』は『影の世界』では名前しか出て来ませんが、重要な人物です。正体は今回は明かすつもりはありません。

これからもよろしくお願いします。

第44章 新たな取引

「さっき報告があった…。」

目暮の前には捜査一課の刑事達が集まっている。集まっている刑事の目は真剣な瞳をしている。

「指名手配の久保哲也が数日前に東京に入った事が分かった。」

久保哲也は数カ月前に東北地方で数件の殺人事件を起こして逃亡をしている。その殺人犯の久保哲也が東京に潜んでいる事を聞いて刑事達は少し驚いた。

「久保は東京でも殺人を起こすかもしれん。殺人が起こる前に久保を逮捕するんだ。」

目暮の勢いのある声で刑事達は久保の逮捕に全力を尽くすと決意した。

「明後日…、この男と取引をしろ。」

ジンはポケットから一枚の写真を出して、由香に渡した。暗い闇の

ような部屋ではジンと由香しか居ない。由香は渡された写真に視線を移した。

「東田幸雄…、そいつの名前だ。」

「取引場所は？」

由香は写真をポケットに入れて、視線をジンに向けた。

「杯戸町にある洒落たショッピングモールの7階だ。奴は正午頃、黒いケースを持って現れる。直ぐ見つけられる筈だ。」

「ねえ…、取引だけよね？」

ジンが話し終わると、由香はゆっくりと口を開いて尋ねた。

「何が言いたい…？」

暗くてジンの表情は読み取る事が出来ない。しかし、暗くても殺気のようなオーラは感じる。

「取引相手を殺さないわよね？」

「殺すか殺さないかは組織の判断だ。お前はただ命令に従えば良いだけだ。」

ジンはそう言い捨てると、部屋のドアを開けた。開けた途端、明かりが暗い部屋を不気味に照らした。ジンは勢い良くドアを閉めて部屋を出て行った。部屋はまた、暗い闇に覆われた。

「良かった…。シルフィアがサポートしてくれて。」
翌日、朝早い時間にシルフィアから電話が掛かって来た。まだ、日が昇った頃で由香は少し眠たそうに電話をしている。

『今回はちゃんとサポートが出来るよ。』

由香はその言葉を聞いて少し安心した。前の取引の時はシルフィアの代わりにジンがやって来て、取引相手を殺した。

「シルフィア、取引相手を殺さないでね。」

『分かってる、心配するな。』

由香はその言葉を聞いて安心した。もう、自分の目の前で人を殺させたりはしない。これ以上、罪を重ねてはならないと由香は心の中で決意していた。部屋の中に朝の日差しが注ぎ込まれた。由香は窓の方を振り向くと、太陽がこっちを向いていた。

第45章　く指名手配犯く

「明日の取引、頑張ってください。」

アイリスと由香は街中を歩いている。今日は天気が良く、快晴だ。今日は平日でも沢山の人が街を歩いていた。

「うん…、頑張る。」

由香は大きく頷きながら答えた。アイリスと由香は楽しい会話をしながら歩いていると、パトカーが何台も街中を通り過ぎて行く。

「パトカー多いね。」

由香はパトカーが多く通り過ぎるのに疑問を覚えた。

「何か起こったんですかね？」

アイリスもパトカーの数の多さに疑問を覚えながら歩いていた。

自販機の前で缶コーヒーを飲む目暮が居た。他には誰も居ない。

「指名手配犯が東京に入ったみたいだな。」

コーヒーを飲む目暮の背後から一人の男性の声が聞こえて来た。

「ま、松本管理官。」

目暮は声のする方に振り向いた。目暮は急に声を掛けられてコーヒーを喉につめそうになった。

「厄介だぞ。指名手配犯を捕まえるのは…。」

松本は財布から小銭を出して、自販機に入れた。

「ええ…。」

目暮は飲み終えた缶コーヒーをごみ箱に捨てた。

「しかも、指名手配犯が久保哲也だ。久保は6件の殺人を起こしている。早く捕まえないと東京でも殺人が起こるぞ。」

松本は自販機のボタンを押して、缶コーヒーが出て来た。松本は自販機から缶コーヒーを手に取り、缶コーヒーの蓋を開けてコーヒーを飲み始めた。

「それに、久保は拳銃を所持しているかもしれんしな…。」

「…必ず逮捕します。」

目暮は被ってた帽子を深く被り、自販機から離れて行った。

「（気をつけろ…。）」

松本はコーヒーを飲み終えて、ごみ箱に飲み終えた缶を捨てた。

第46章 〽潜伏〽

部屋の中からは目覚まし時計のアラーム音が響いて来た。由香はベットから起き上がり、目覚まし時計のアラームを止めた。アラーム音が止まると部屋は物静かになった。

「（8時…か。）」

目覚まし時計はちょうど8時を指していた。

「（取引時間は正午だったよね。）」

由香はベットから立ち上がり、窓の方を見た。今日は曇り空が空を覆っている。

都内是指名手配犯を捕まえる為にパトカーが走り回っている。

「ハア…、ハア…。」

路地裏の壁にもたれ掛かりながら一人の男性が隠れる様に居た。

「くそ…。」

男性は辺りを伺いながら近くにあった空き缶を蹴った。路地裏に隠れて居る男性は警察が追っている指名手配犯の久保哲也だ。久保はポケットから拳銃を出して、拳銃を見ながら不気味に笑った。

由香はシルフィアと合流してシルフィアの車で取引場所のショッピングモールに向かっていった。

「もし、何かあったら知らせろよ。一応、俺はお前の近くに居るから…。」

「うん、分かった。ちゃんと守ってね。」

シルフィアと由香は真剣な表情をしている。二人とも何処か緊張してる様子だ。

「ああ…。」

「（必ず守るさ…。）」

シルフィアはさっきよりもハンドルを強く握った。シルフィアは車のスピードを少し上げて、取引場所のショッピングモールに向かっ

て行った。

「おい、そこで何をしている？」

路地裏に隠れていた久保の背後から声が聞こえて来た。久保が振り返ると一人の警官が経っていた。

「お前…、久保哲也だな。」

警官はゆっくり久保に近付いて来た。久保は舌打ちをして警官に拳銃を向けた。

「来るな！来たら撃つぞ！」

久保は大きな声を上げながら拳銃の銃口を警官に向けた。拳銃を向けられた警官は少し怖じけづき立ち止まった。久保は警官が立ち止まるのを見て路地裏から走って行った。警官は久保を追う為に走りだした。

第47章 　　ゝ逃走ゝ

「なに！」

目暮の驚いた声に部屋に居た刑事達が一斉に目暮の方を見た。

「分かりました…。」

目暮はそう言い終えると、受話器を置いた。

「久保哲也が現れた。場所は杯戸町…、数名の警官が追っている。」
目暮から久保と言う言葉を聞いて刑事達の顔は真剣になった。

「今から杯戸町に向かうぞ。」

「はい！」

刑事達は一斉に部屋から出て行く、目暮も刑事達と一緒に部屋を出た。

「どけ！撃つぞ！」

久保は拳銃を持ちながら街中を走っている。街中を歩いている人達は久保が持つ拳銃を見て悲鳴や恐怖を感じている。

「久保、待て〜！」

久保の後ろから久保を追う警官達が走って来てる。久保を後ろをちらっと見て舌打ちをした。久保が前を向くと、前からも警官が追って来てる。

「くそ…！」

久保は曲がり角を曲がり、走るスピードを上げた。後ろからは警官達が必死に追って来てる。

ショッピングモールの駐車場には沢山の車が止まっている。シルフィアが運転する車も駐車場に止めてある。

「じゃあ、私は先に行くね。」

由香は車から降りながらシルフィアに言った。

「ああ…、俺もあとから行く。」

「分かったわ。」

由香はそう言い終えると、ショッピングモールの入口に向かって歩き出した。シルフィアは車の中から由香の様子を見ていた。

「止まれ！久保！」

久保を追う警官達の声が街中に響いてる。久保を追う警官達の数は段々増えている。

「（誰が止まるか。）」

久保はスピードを緩める事もなく、走り続けている。

ショッピングモールの入口に入った由香は取引場所の7階に向かう為エレベーターがある所に向かっていた。由香から少し後ろをシルフィアが由香のあとを追っている。

「（確か…、取引場所は7階で時間は正午だったな。）」
シルフィアはポケットから写真を取り出しながら今日の取引の確認をしながら考えていた。

「（この男と取引か…。）」
取り出した写真は東田幸雄の写真だった。その時、シルフィアは誰かとぶつかり写真を落としてしまった。

「あ…。」
シルフィアは落ちた写真を拾い、ぶつかった人物を探した。辺りを見渡すとシルフィアの前を一人の男性が走った。

「ぶつかったんだから謝れよ。」
シルフィアは文句を言いながらその男性を見ていた。その時、男性の手に拳銃が握られているのを発見した。その男性の目の前には由香が歩いていていた。

「由香！逃げろ！」
シルフィアはショッピングモール内に響くぐらいの声で叫んだ。

「え？」
由香は立ち止まり、後ろを振り返った瞬間、走って来た男性に捕ま

り、拳銃を突き付けられた。その時、シルフィアの後ろから警官が走って来た。

「来るな！来たらこの女を殺すぞ！」

警官の姿を見た男性は拳銃を由香に突き付けながら叫んだ。警官は人質が居る事に気づき、立ち止まった。周囲に居た客は拳銃を見て、逃げ惑ってパニック状態になっていた。

第48章 人質

「良いか！それ以上近付いたらこいつを殺すからな。」

警官は困惑しながら立ち止まっている。シルフィアは警官の後ろで固まった様に立ち尽くしている。拳銃を突き付けられた由香は助けを求める様にシルフィアを見ていた。

「（シルフィア…、助けて。）」

「（くそ！どうする？）」

由香の視線に気付いたシルフィアは由香を助ける策を考え出した。

「なに！久保が人質を取ってるだと！」

助手席に座る目暮の声は車の外にも聞こえそうだった。車を運転している高木は久保が人質を取った事に驚いている様子だ。

『はい。人質は一名、場所は杯戸町のショッピングモールです。久保は拳銃を所持しています。』

目暮が電話をしているのは佐藤とだった。

「今からそっちに向かう。」

目暮はそう言い終えると、電話を切った。

「高木君、直ぐにショッピングモールに向かってくれ。」

「分かりました。」

高木は車のスピードを上げて、ショッピングモールに向かった。

「バレンシアがどっかの殺人犯に捕まったらしい。」

同じ頃、警察と同じ情報を組織が手に入れていた。その言葉を聞いて、ポルシェを運転するウォッカが驚いた。

「本当ですかい？」

耳を疑う様な話した。組織の人間が殺人犯に捕まるなんて…。

「シルフィアからの情報だ。間違いねえ…。」

ジンは表情を一つも変えずに答えた。

「兄貴、やばいじゃないですかい？」
ウォッカは困惑しながらも運転に集中している。ジンは何も答えず、ポケットから携帯を出した。

ショッピングモールの周囲には警察が沢山集まっていた。周りにはマスコミや騒ぎを聞き付けた人達が集まっている。上空にはヘリコプターも飛んでいる。緊迫した事態の中、高木が運転する車がショッピングモールに到着した。目暮と高木は車から降りた。

「警部…。」

佐藤が目暮と高木を見つけて近付いて来た。

「今の状況はどうなってるんだね？」

「今の所、人質は無事です。」

佐藤の言葉を聞いて目暮は少しだけ不安が取れた感じがした。

「よし、行くぞ。」

目暮はショッピングモールの入口に向かって歩き出した。佐藤と高

木もショッピングモールの入口に向かって歩き出した。その時、高木の携帯が鳴った。

「すみません。先に行って下さい。」

高木はそう言い終えると、ポケットから携帯を取り出して電話に出た。

「高木ですけど…。」

『俺だ、アクアビット。』

「ジン…。」

電話の相手がジンからだった。ジンから電話が掛かって来ると思ってたなかった高木は少し驚いた顔をした。

第49章 要求

ショッピングモール内には緊迫した時間が流れている。久保は辺りを見渡しながらか警戒をしている。シルフィアは警察から少し離れた所に居た。

「（どうしたら由香を助けられる？）」

シルフィアは腕を組みながら考えている。

「（拳銃を使うか？）」

シルフィアはポケット入れてある拳銃の方を見た。

「（いや、ダメだ。拳銃を使ったら由香に危害が及ぶ可能性がある。しかも、此処には警察が居る。拳銃は無理だな。）」

シルフィアは拳銃を使う事を諦め、拳銃を使わずに助けられる方法を考え始める。

「久保、もう逃げられない。諦めて人質を解放するんだ。」

シルフィアが考え始めた直後、日暮が久保に向かって言い放った。

「うるせえ！近づいたらこいつを殺すぞ！」

久保は由香に突き付けられている拳銃をさらに強く突き付けた。それは、警察に対する威嚇の様に…。

「バレンシアを人質に取ってる男は久保と言う指名手配犯だ。」
ジンは腕を組みながら煙草を吸ってる。

「久保って警察が追ってる奴じゃないですかい…。」

「兄貴、どうするんですかい？」
ウォッカはジンからの返事を待った。

「刑事さんよ…。人質を助けたければ車と金を持って来い。」
久保は不気味な笑みを浮かべながら目暮に要求をして来た。

「助けたいんだろう？人質を…、だったら早く持って来い！」

「警部、どうします？」

佐藤が目暮に近付いて小声で尋ねた。

「…やむを得ない。人質の命が優先だ。」

目暮の表情は悔しい顔をしている。早く久保の行方を掴めていたらこんな大事にはなる事はなく、悔しい判断をしなくても良かった。必ず人質を助ける、目暮は決意を固めてる。

「(さて、これからどうするか?)」

高木は先程、ジンからの電話で組織の人間が人質になった事を聞いた。

「(簡単に捕まってくれたら有り難いが…、あの男は人質を使って逃げるきだからな。)」

高木は今にでもため息が出るくらいの面倒そうな顔をしながら今の状況を見ている。

「(どうして…、こんな事になったの?)」

由香は久保に捕まってから自分に何度も問い掛けていた。自分が犯罪者のだから? 自分が闇の人間だから? 私は死ななきゃいけないのか? 由香は同じ事を問い掛け続けている。

「(神様は私に罰を与えてるの? 神様は私に死ねって言うてるの?)」

由香は神に返って来ない問い掛けを続けている。これが神の悪戯なのか?

「(私はまだ、死にたくない。)」

第50章 〱 赤井秀一 〱

「ど、どういう事だ？」

シルフィアは電話で誰かと話しをしている。

『さっき言った通りだ。その殺人犯とバレンシアを殺せ…。』
シルフィアの電話の相手はジンだった。

「殺人犯を殺すのは分かるが…。何故、バレンシアを殺す必要があるんだ？」

判断に納得のいかないシルフィアはジンに尋ねた。

『その殺人犯が警察に捕まったら人質になってたバレンシアにも事情は聞く筈だ。警察がバレンシアの事を調べだし、組織の情報がばれる可能性がある。』

「しかし…。」

シルフィアはジンの判断にまだ納得がいかない様だ。

『これは命令だ…。』

威圧感のある声がシルフィアの耳に入ってきた。ジンはそう言い終えると、電話を切った。

「くそ！何が命令だ！」

シルフィアは携帯を壊れるぐらいの力で強く握った。

「（由香…。）」

シルフィアは由香の方に視線を向けた。

『ちゃんと守ってね。』

シルフィア是由香の方を見ながら由香に言われた言葉を思い出していた。

「（守るって決めたのに…、約束したのに…、俺はあいつを守れないのか？）」

シルフィアは何も出来ない自分が悔しかった。

『これは命令だ…。』

ジンから電話を切る前に言った言葉が冷たく感じた。

「（分かった…よ。）」

シルフィアは何かを決意し、ポケットに入れてゆつくり歩き出した。

バン…、

「うわああ…。」

銃声がした直後、久保は腕を撃たれ、拳銃を落として床に倒れた。

「確保だ！」

目暮の号令でショッピングモールに居た刑事達は一斉に久保に向かった。一瞬にして久保の周りには刑事に囲まれた。

「あれ、由香は？」

シルフィアは辺りを見渡した。由香の姿は久保の近くにも、警察の近くにも姿はなかった。

さっきの騒ぎで地下は誰も居ない。由香は誰も居ない地下を歩いている。響くのは由香が歩くと聞こえる靴の音だけ…。

「その様子だと取引は失敗のようだな。」

由香の背後から聞き慣れない声が聞こえて来た。由香は立ち止まり、警戒しながら声のする方を振り向いた。その瞬間、由香は驚いた。

「赤井：秀一。」

そこに居たのはFBI捜査官の赤井秀一だった。由香は何故、赤井が此処に居るのか分からなかった。最初から自分の事をマークしてたのか？それとも偶然居合わせたのか？

「俺の事を知ってるという事はやはり、奴等の仲間か…。」

赤井がそう言い終えた途端、由香は素早く拳銃を取り出して赤井に向けた。

「さっきあの男を撃ったのは貴方？」

「ああ…。あの様子だと警察は動き様がなかったからな。」

赤井は拳銃を向けられても冷静な表情をしている。

「それより今、拳銃を使うのはまずいと思うが…。」

「貴方に捕まらないためよ。捕まったら私は終だから。」

由香は銃口を赤井に向けて、引き金に手を延ばした。

「…撃てるか？」

赤井はそう言い終えると、ゆっくりと由香に向かって歩き出した。

由香は赤井から視線を離さなかった。赤井は歩みを辞める事なく由香に近付いて来る。しかし、由香は拳銃の引き金を全く引かない。さらに、由香の手は震えていた。赤井は由香に近付いて由香が構えていた拳銃を取った。

「何故、撃たなかった？」

赤井は由香が撃たなかった事に不思議に思った。

「俺がお前と同じ立場なら躊躇せずに撃つが…。」

「私は…、目の前で人が死ぬのが嫌なの。もう見たくないから…。」

由香は俯きながら答えた。

「そうか…。お前は組織に染まってない様だな。」

赤井はそう言いながら、拳銃を由香の手に返した。

「忘れるな、その心を…。」

赤井は最後にそう言い終えて、由香の横を通り過ぎて行く。

「ちょっと待って。私を捕まえないの？」

由香は赤井の行動に驚いた。

「俺が捕まえたいのはお前じゃない…。」

赤井は立ち止まる事なく、由香の視界から消えて行った。その様子を高木が隠れて見ていた。

「（赤井秀一…、なんで此処に？）」

高木は腕を組みながら考え込んだ。

「由香、こんな所に居たか？」

シルフィアが走りながら由香に近付いて来た。

「シルフィア…。」

「大丈夫か？怪我とかしてないか？」

シルフィアは心配そうな顔で由香を見た。

「大丈夫よ。心配してくれてありがとう。」

シルフィアの心配する顔を見て由香は優しく微笑んだ。

「とにかく、此処から出よう。」

「ええ…。」

シルフィアと由香は出口に向かって歩き出した。

第51章　心の謎

「由香さんが無事で良かった。」
何時もの喫茶店でアイリスと由香は昨日の出来事のことを話している。

「ごめんね、心配かけて…。」

由香は手を合わせながらアイリスに謝った。

「でも、本当に怖かった。もしかしたら、殺されるんじゃないかって…。」

由香の手は微かに震えていた。由香の震える手を見て、アイリスは何て言葉を掛けていいか分からなかった。

「あ、ごめん。また、変な話をして…。」

「いえ…。由香さんが怖い思いをした事が分かりました。」
アイリスは首を振って否定をした。

「取引は失敗したけど…。」

「私は取引より由香さんが死ななかつただけで本当に嬉しかった。」
アイリスは心の底から嬉しさと安心を感じていた。

「ありがとう本当に…。」

由香は優しい微笑みを浮かべた。アイリスはテーブルに置かれたコーヒーが入ったカップを手に取り、コーヒーを一口飲んだ。

アイリスと別れた由香は街中を歩いていた。由香は歩きながら街中を歩く人達を見ながら歩いている。

『忘れるな、その心を……。』

由香は昨日、赤井に言われた言葉を思い出した。

「（心……か。）」

由香は立ち止まり、空を見上げた。赤井に言われてから考えていた心の意味……、しかしその答えは出る事はなかった。もしかしたら、今の自分にはその意味を知る事は出来ないのかも知れない……と由香は空を見上げながら思った。

「（どうして赤井秀一は私にあんな事を言ったの……？それに、どうして私を捕まえなかったのかしら？）」

FBIは組織を追い続けてる。赤井秀一もその一人とは組織の人間も知ってる。組織が恐れるFBI捜査官。しかし由香は何故、赤井が自分も捕まえなかったのか疑問に思ってる。わざと取り逃がしたのか？それとも、何かの作戦なのか？考えれば考える程、頭が混乱

しそうになった。だが、由香の心には捕まりたいと気持ちりが微かにあった。

「（赤井秀一か…。）」

由香は再び歩き出した。太陽の日差しが注ぐ街中へと消えて行った。

第52章 敵

「カルバドスは死んで、ベルモットは負傷…か。」

高木は壁にもたれながら腕を組んでいる。

「まあ、赤井秀一が現れたんだからしょうがないか…。」

五日前、ベルモットは赤井秀一と対峙したが負傷として戻って来た。その際、カルバドスは逃げられないと思って自殺をした。

「それより、何の用だ？」

高木の目の前には煙草を吸ってるジンが立っている。

「バレンシアが久保って言う殺人犯に捕まった件でな。」

高木はもたれ掛かった壁から離れた。

「あの事がどうした？」

「あの時、バレンシアは赤井秀一と接触してた。」

「赤井があ場所…。」

ジンは赤井があショップピングモールに居た事に少し不審に思った。最初からFBIに感づかれていたのか？

「バレンシアは赤井に拳銃を向けていたが、赤井を撃たなかった。」

「あの女、組織にとって危険かもな…。」

高木はそう言い終えると、ゆっくり歩き出した。ジンは高木が去って行くのを見て、冷酷で冷たい笑みを浮かべた。

「…で、話して何だ？」

翌日、シルフィアは由香との待ち合わせの喫茶店に来ていた。由香は既に喫茶店に来ていた。

「この前のショッピングモールでの事は覚えてるよね？」

「ああ…。けど、それがどうした？取引が失敗した事を心配してるのか？」

シルフィアは注文してテーブルに置かれた紅茶が入ったカップを手にとった。

「あの時…、赤井秀一に会ったの。」

由香の言葉を聞いてシルフィアは手に持っていたカップを落としそうになった。

「ほ、本当か？赤井秀一がああのショッピングモールに居たのか？」

シルフィアは動揺と驚きを隠せなかった。

「ええ…。けど、赤井秀一は私を捕まえなかった。」

「え？」

「FBIの捜査官が組織の人間を見つけたら普通は捕まえる筈よ。」

「赤井秀一は由香を捕まえず、取り逃がしたのか？」
シルフィアは紅茶を飲みながら尋ねた。

「うん…。その時に赤井に言われたんだ。『お前は組織に染まってない』『忘れるな、その心を…』って…。」

「なあ由香、FBIの何かの罠かも知れないぞ。」
シルフィアは紅茶が入ったカップをテーブルに置き、急に冷静な顔をに変わった。

「どうして？」

「赤井秀一は俺達を追ってる敵だ。お前を取り逃がしたのには何か罠を用意してるんじゃないか？赤井秀一がお前を取り逃がす訳がない。」

「でも…、そんな風には見えなかったけど…。」
由香はコーヒーを飲みながら答えた。

「由香、騙されるな。赤井は俺達の敵だ。」

「う、うん…。」

由香は少し困った表情をしながら曖昧な返事をした。

第53章 く存在の意味く

『アイリス、例の件はどうなってる?』

とある公園のベンチにアイリスが座ってジンと電話をしている。ジンが言う『例の件』とは前にジンから渡されたメモリーカードに入ってる組織が極秘に進めてる研究の情報収集の事…。

「少しずつ進んでいます。」

『そうか…。』

ジンはそう言い終わると、電話を切った。電話が切れると、アイリスは携帯を閉じてポケットに入れながらため息をついた。

「こんな場所で休憩か?」

アイリスが顔を上げるとシルフィアが立っていた。

「貴方こそどうして?」

目の前にシルフィアが現れた事に少し驚いた。

「ちょっと用事で通り掛かったら君の姿を見つけてね。」

シルフィアはアイリスが座ってる隣のベンチに座った。

「前に…言っていましたよね。『組織に居てどう思う?』あれ、どういう意味ですか?」

「君はどうなんだ? 組織に居てどう思う?」

シルフィアはアイリスの方に視線を移しながら尋ねた。

「私は…分からない。」

アイリスはずっと前を見ている。アイリスが見る視線の先には子供達が楽しく遊んでいる。その子供達の楽しそうな声がアイリスとシルフィアにも聞こえて来た。

「…俺は時々分からなくなる。何の為に組織に居るかって…。」

「俺が居なくても組織は動く。組織は一人か二人で成り立ってるものじゃない。」

シルフィアは空を見上げた。空を見上げると太陽の日差しが暖かく感じた。

「組織に居るのに組織が何をしようとしてるのか分からない。必要が無くなったら始末する。組織の人間には心があるのかないのか分からない…。」

「…貴方は心があるの？」

今まで黙っていたアイリスが口を開いて尋ねて来た。

「どう思う…？」

「分からないわ…。」

アイリスはさらりと答えた。

「そうか…。」

シルフィアはそれ以上は何も言わなかった。シルフィアは空から視線を外して公園で遊ぶ子供達を見た。

「え？バレンシアが赤井秀一と接触したってどういう事ですかい？」
ポルシェを運転しているウォッカが赤井秀一の言葉を聞いて驚いた。

「あのショッピングモールに赤井が居たみてえだ。」
ジンは黒い帽子を深く被っており、その表情は伺えない。

「しかし、赤井はどうしてあのショッピングモールに？」

「さあな……。最初からあそこで取引する事を知ってたのか？それとも、偶然居合わせたのか？赤井がどんな理由であの場所に居たかは知らねえが……。奴が現れたのは事実だ。」

今、ウォッカにはジンが何を考えてるのか分からない。だが、赤井秀一が現れたと言う事はFBIが動いている事だ。ウォッカは少し不安感が体中に巡って来た。

「これからどうするんですかい？」

「あの女に監視を付けろ。気付かれない様にな……。」
ジンは顔を少し上げて答えた。見えなかったジンの表情が不気味に見えかけた。

「了解。」

ウォツカは一言だけそう答えた。

第54章 く普通の生活く

三日後、アイリスの住むマンションに由香が遊びにやって来た。

「出来たよ。私が腕を振るった美味しいパスタ。。」

由香は嬉しそうな顔をしながらパスタが入った皿をテーブルに置いた。

「美味しそう：ですね。」

アイリスは由香が作ったパスタを見た。今日、由香がアイリスの住むマンションに來た理由は料理を作りに來た為だ。

「冷めないうちに食べよ。」

由香はそう言い終えると、いただきますと言ってパスタを食べ始めた。アイリスもパスタを食べ始めた。

「どう？美味しい？」

由香の表情は少し不安げな表情でアイリスを見ている。

「美味しいです。」

「良かった。私、料理はあんまり得意じゃないから。」

由香は胸を撫で下ろす様に少し不安が取れた感じがした。

「そんな事ないですよ。本当に美味しいです。」

「でも、舞ちゃんよりは上手じゃないよ。」

由香は自分が作ったパスタを一口食べた。

「この前、クッキーを買ったんだけど…由香さん食べます？」

「うん、食べる。」

アイリスは由香の返事を聞くと、立ち上がりクッキーの箱が置いてある所に取りに行った。アイリスはクッキーの箱を取り、由香の元に戻って来た。

「クッキーどうぞ…。」

クッキーの箱をテーブルに置き、箱を開けた。

「美味しいよ、このクッキー…。」

由香は箱から一つクッキーを取り出して食べた。アイリスも一つクッキーを食べた。

「ねえ…舞ちゃん。」

クッキーを食べ終えた途端、由香の表情は少し変わった。

「何ですか？」

「例えば…、組織から逃げれるとしたらどうする？」

「え？」

アイリスは驚いた顔をした。由香の方に視線を移すと彼女の表情は真剣だった。

「私は…もし組織から逃げれるのなら逃げてみたい。一度で良いから普通に生きてみたい。組織に恐れず、恐怖すら知らない世界に…。」
さっきまでの真剣な表情から一転して悲しい表情に変わった。

「私も…、一度で良いから普通の生活をしてみたい。もし、組織から逃げる事が出来るのならそうしたい。」
俯きながらアイリスは静かに答えた。

第55章　く妨げく

使われなくなった倉庫の真ん中辺りに由香は花束をそっと置き、手を合わせた。倉庫の中は使っていた器械や使われていた道具が残されている。

「（ごめんね。貴方の事を守れなくて…。）」

由香の瞳から涙が少しずつ出て来た。

「（私ね…このままじゃダメだと思うの。貴方が生きてたら私が考えてる事をどう思う？賛成してくれる？反対する？）」

由香は花束を見ながら誰にも聞こえない問い掛けをした。

「（でも、私はこの決意は変えない。反対されても…。）」

由香はそう言い終えると、倉庫の出口に向かって歩き出した。歩き出すと、優しい風が由香の間を通り過ぎて行った。その風は優しく由香を包んだ。由香は幸せそうな微笑みを浮かべて倉庫から出た。

「…終わったのか？」

倉庫を出るとシルフィアが寒そうにしながら待っていた。

「うん、終わった。」

「君の妹は君に会えて良かった筈だ。」

シルフィアはそう言い終えると、車が止めてある場所に歩いて行った。由香もあとに続いて歩き出した。

「話しは聞いている。バレンシアが赤井秀一と接触した事だろ？」
小田切の目の前には高木が立っている。しかし、小田切は高木に背を向け窓から見える風景を見ている。

「ええ…。今、バレンシアの行動を組織が監視をしています。もちろん、バレンシアには気付かれない様に…。」

「それが、賢明だろう。」

小田切は窓から視線を外して高木の方に振り向いた。

「しかし、あのショッピングモールに赤井秀一が居たのには驚きました。」

「まあ、赤井がどんな理由で現れたかは考えても無駄だ。それより、バレンシアが赤井秀一と接触した事が厄介だ。」

小田切は椅子にもたれ掛かる様に座った。

「赤井の事ですから何か仕掛けて来るかも知れません。」

「彼是我々にとって脅威だからな。」

小田切は腕を組みながら答えた。

「…ですが、たった一人では組織に危害は及ばないと…。」
高木の言葉を聞いて小田切は一瞬笑みを浮かべた。

「まあ、そうだな。だが、我々の目的の妨げになるのは除外は必要だ。」

「……………」

高木はそれ以上は何も答えなかった。その後、高木は部屋から出て行った。

第56章 決意

「今日はありがとうね。」

シルフィアが運転する車の助手席に由香は座っている。

「今日は時間があつたからな。」

「シルフィア…、話しがあるんだけど聞いてくれる？」
由香の声のトーンが少し小さくなった。

「ああ…、聞くよ。」

シルフィアは運転に集中しながら由香に答えた。

「私、組織から逃げようと思ってるの。」

由香の言葉を聞いてシルフィアは何も答えず黙っている。

「前にシルフィアが危険だつて言つてたけど…、私はこのままじゃダメだと思う。」

由香は車を運転しているシルフィアの方を見た。シルフィアは何時もの表情だった。

「シルフィアが前に言った時、組織を壊滅させる人物が現れるって…それは赤井秀一の事じゃない。」

「赤井秀一なら助けてくれるかも知れない。だから…。」

「…組織から逃げるって事か？」

黙って聞いていたシルフィアが口を開いた。

「ええ…。」

「赤井秀一は俺達の敵だぞ。どうして、赤井なんかに助けを求める？」

シルフィアの声のトーンは由香とは逆に上がり、怒った表情をしている。

「赤井はあの時、私を捕まえたり殺したりしなかった。」

「それはFBIの罠だ。FBIは君に何かをしようとしてるんじゃないか？」

「どうして赤井秀一を敵視するの？シルフィアは赤井と会った事ないじゃない。どうしてそんな風に言うの？」

由香の声のトーンが上がり、何かを訴えてる様な感じた。

「それは…。」

シルフィアは何て返事すれば良いか分からず、言葉に困った。

「私はあの人は悪い人じゃないと思う。悪い人ならあんな事は言わない。」

由香は赤井と出会った時、言われた言葉を思い出した。

『お前は組織に染まってない様だな』

『忘れるな、その心を…』

「心を…、忘れたくない。」

由香がぼつりと言った言葉にシルフィアはちらつと由香の方を見た。由香の瞳には涙が少し浮かんでいた。

「ごめんね、シルフィア…こんな事を言って…。でもね、私は一度で良いから普通に生きてみたかった。だから、舞ちゃんと一緒に組織を抜ける。」

由香の表情は決意に満ちている。

「アイリスも組織から逃げるって言ってるのか？」
シルフィアはアイリスの名前が出て驚いた。

「まだ、何も言ってない。けど、舞ちゃんはたぶん…。」

「反対しても無駄みたいだな」
シルフィアは少し呆れながら呟いた。

「え…？」

由香は驚いた顔をした。

「お前が組織を裏切るのなら俺も裏切る。」

「どうしてシルフィアが？」

意外だった言葉がシルフィアから出た事に由香は二回目の驚きを見せた。

「俺も…、普通の人生を送ってみたいから。」

「ありがとう、シルフィア。何時も助けられてばかりだね。」

「じゃあ、組織から逃げたら何かお礼をくれよ。」
シルフィアは穏やかな笑みを浮かべながら言った。

「良いよ、じゃあ約束ね。」

由香の表情も穏やかになり、笑顔を見せた。

「ああ…、約束だ。」

「先ずはアイリスと話して何時逃げ出すかだな。」

シルフィアの言葉を聞いて由香は黙って大きく首を縦に振った。シルフィアが運転する車の後ろを一台の車があとを付けていた。不気味な様に…。

第57章　　く鮮血く

組織がある人物の暗殺計画を実行した時、キールがFBIに捕まった。どうやら、FBIは組織が暗殺計画を企ててる事を知ってた様だ。キールがFBIに捕まった事は組織に衝撃が走った。今、組織は必死になってキールの居場所を探してる。俺がその情報を知ったのは組織の命令で監視をしている時だ。今もシルフィアは組織の命令で監視を続けている。

「（逃げるとは言ったが…、どうやって逃げるかだな。）」
シルフィアは車の椅子にもたれ掛かりながら考えている。

「（俺達が逃げたら組織は必ず追って来る…。けど、俺はあいつを守るって約束した。だから…、どんなに組織が追って来ても俺はあいつを守る。）」

シルフィアの瞳は覚悟と決意に満ちた目をしている。

FBI…、組織を追ってる者達。キールがFBIに捕まった事は組

組織の全体に知れ渡ってる。しかも、FBIには組織が恐れる赤井秀一が居る。仮にキールの居場所を突き止めてもFBIは警備を固めてる筈。それに、キールが組織の事を話す可能性も高い。ジンの命令で私はキールの行方の情報を調べていた。

「（普通の生活…か。）」

アイリスはパソコンをしていた手を止めて考え出した。

「（もし、組織と言う宿命を背負わなければ私は普通の時間…普通の楽しさを味わえたのかな？）」

パソコンの画面を見ながらアイリスは返って来ない問い掛けをした。

「（けど、組織から逃げる事は出来るの？）」

組織から逃げる事は考えると、今まで組織がやって来た冷酷で恐怖が脳裏に蘇る。その時、アイリスの脳裏にシェリーの脱走を思い出す。彼女は組織から脱走してから今まで殺されたり、捕まったりした情報はない。

「（組織から逃げれる可能性は0%じゃない。）」
アイリスは少し希望が見えた様な感じがした。

同じ頃、由香はある場所に来ていた。その場所是由香の妹が亡くなった廃倉庫だ。

由香は倉庫の中に入り、立ち止まった。

今回、組織の命令で由香は取引をする事になっていた。そして、その取引場所がこの倉庫だった。由香はその事に疑問を覚えた。ただの偶然なのか？それとも何か意図があるのか？由香が考え込んでいる時、背後から誰かが倉庫に入って来た。由香は取引相手だと思い、後ろを振り向いた。しかし、振り向いた先に居たのは思いがけない人物だった。

「ジン…。」

倉庫に現れたのは取引相手ではなくジンだった。

「どういう事？今回はサポートは無しの筈よね？」

由香はジンが現れた事に動揺と驚きを見せた。

「サポートじゃねえし、取引もない。」

ジンの言葉に由香は何かを悟った。その時、ジンはポケットから拳銃を出して由香に向けた。

「…お前があの時、赤井秀一を殺さなかった事にあの方が疑問を感じてな。」

ジンは由香から銃口を外さず話し出した。

「…危険な者は排除する事だ。」

「つまり、私を此処に呼び寄せたのも最初から罠で…殺すつもりで訳ね。」

由香は拳銃を向けられても冷静に淡々と答えた。

「そういう事だ…。お前があの時、赤井を殺していればこうなる事はなかったぜ。」

「（舞ちゃん、シルフィアはごめんね。一緒に居れそうにないみたい。）」

由香の今にでも涙が出そうだった。しかし、由香は涙を堪えている。

「そろそろ話しは終わりだ。この場所で死ぬる事を有り難く思いな。」

ジンはそう言い終えると、拳銃の引き金を引いた。

バン…、

倉庫内に非情な銃声が響き、鮮やかな鮮血が倉庫内に広がった。

第58章　　～最期～

シルフィアは監視をしながら車の中で缶コーヒーを飲んでいる時、シルフィアの携帯がなった。シルフィアは少し面倒そうに電話に出た。

「はい、もしもし…。」

『私…、由香だけど…。』

電話の相手は由香からだった。電話相手が由香だと分かり、シルフィアの表情は穏やかになった。

「どうした？由香…。」

『シルフィア…私の最期の…お願いを聞いてくれる？』

受話器から聞こえて来る由香の声は元気が無く、今にでも消えそうな声だった。

「最期って何だよ？何かあったのか？」

『何も…ないよ。だから…、私の最期のわがままだと思って聞িয়েくれる。』

由香の声は段々と小さくなって来ていた。

「終わっただんですかい？」

ジンがポルシェに乗り込んで来てからウォツカはジンに尋ねた。

「ああ…、あの女は始末した。」

「これで厄介事が一つ解決したわね。」

ポルシェの後部座席にベルモットが足を組みながら座っている。

「厄介事はまだ残ってる…。」

ジンはさらりと呟いた。

「シェリーとキールの事ですかい？」

ウォツカはジンの言葉を聞いて尋ねた。

「FBIが何処に匿ってるかも分からないしね。」

「分からなければ…、探りを入れるまでだ。」
ベルモットのあとにジンがそう言った。

「ウォツカ、車を出せ。」

「了解。」

ウォツカはそう言い終えると、ポルシェを発進させた。

「どうして？ どうして由香さんが…。」

翌日、由香が死んだ事は嫌でも耳に入って来た。

『どうして由香さんが亡くなったんですか？』

由香の死を聞かされた直後、アイリスはジンに問い詰めた。

『由香…？ あの女の事か。』

『言った筈だ。あの女が死んだのは任務に失敗したからだ。』

ジンの表情は何も感じない冷酷な表情だった。

『だったらどうしてサポートを付けなかったんですか？』

アイリスの表情は涙を浮かべた悲しい表情だ。

『サポートは無用だと判断したからだ。』

ジンはそう言い終えると、アイリスから離れて行った。

「由香さん…。」

今は涙を流す事しか出来なかった。涙を流す度に由香との楽しい思い出が蘇る。もうあの元気な声が聞く事も出来ない、あの優しい笑顔もう見られない。そう思うと涙は止まらず、溢れるばかりだ。

「（私は…由香さんに助けてもらってばかりだったのに…、何も恩返し出来てないのに…。教えてもらいたい事もまだ一杯あったのに…。また、二人で海に行くって約束したのに…。どうして…。）」
私はこれからどうしたら良いの？由香さんを亡くした私はこれからどうしたら良いの？アイリスは涙を流し続けながら自分に問い掛けた。

第59章　　真相

シルフィアは由香が死んだ倉庫に来ていた。辺りを静かで、良い感じはあまりしなかった。シルフィアは倉庫に入り、倉庫の真ん中に立った。

「（あの時の電話がお前の最期の声だったんだな。）」
シルフィアの悲しい表情を覗かしている。

「（俺はその事に気付かなかった……。ごめんな由香。）」
シルフィアはその時、思った。自分は由香の事を本当は全然知らなかったんじゃないか？

「（君が最期の頼み……。俺は必ず叶える。）」
シルフィアは決意した顔をして倉庫の出口に向かって歩き出した。

由香の死から三日が経った。アイリスは由香が死んでから部屋に閉じこもり、食事は喉を通らなかった。今のアイリスは抜け殻の様な

物だ。由香と言う大切な存在を亡くした事は彼女にとって支えを無くしたに等しい。その時、暗くて静かな部屋で携帯がなった。アイリスはテーブルに置いてある携帯を取り、電話に出た。

「もしもし…。」

アイリスは声にもならない声で電話に出た。

『アイリス、仕事だ。今すぐ来い…。』

受話器からジンの声が聞こえて来た。ジンは伝えたい事を言って直ぐに電話を切った。アイリスは電話を切り、携帯をテーブルに置いた。

仕事…、今は仕事などしたい気持ちにはなれない。私の気持ちなんて組織は考えてくれる事なんてない。今の私には何がしたいのかもこれからどうしたいのかも思いつかなかった。アイリスはテーブルに置かれた携帯を再び手に取った。

アイリスは組織の施設に来ていた。ジンから来いとの連絡があり、アイリスは元気の無い足取りで施設の長い廊下を歩いている。廊下を歩いていると組織の人間とすれ違うがアイリスには俯きながら歩

いているからその人達がどんな顔をして自分の事を見てるか分からなかった。だが、本当は組織の人間の顔なんて見たくなかった。

『アイリスの両親が情報屋だったんですかい？』

アイリスが目的の部屋の前に着くと部屋の中からウォッカの声が聞こえて来た。

「（私の両親が情報屋？どういう事…？）」

アイリスの部屋の前で立ち止まって聞いている。

『正確には情報売ってた人間…。』

部屋の中からはジンの声も聞こえて来た。

『情報って…何の情報ですかい？』

『それがアイリスの両親を殺した理由だ。』

「（私の両親を殺した理由？意味が分からない…。）」

アイリスは今にでも部屋に入って問い詰めようとしたが最後まで聞く事にした。

『まさか…、組織の情報ですかい？』

部屋の中からウォッカの驚いた声が聞こえて来た。

『ああ…。アイリスの両親は組織の事を探ってFBIなどに情報を売ってたみてえだ。』

『その事を知った組織がアイリスの両親を殺した。』

「（私の両親が…組織の情報を売って、その事で組織に殺された…。）」

」

ジンから聞こえる言葉は今まで聞いた事もない両親の秘密だった。今まで両親は組織の人間だと聞かされていた。しかし、私には両親の記憶はなかった。顔を見た事もなかった。だが、やっと分かった。両親の顔も記憶が思い出せないのは組織の人間ではなく、組織によって殺されたからだ。

『アイリスが情報収集に長けてるのはそういう事だ。』

全てを聞いたアイリスは組織に対して憎しみが増大した。由香の事も両親の事も全ての原因は組織にあった。アイリスは何も考えずに部屋から立ち去った。その時、部屋のドアが開いてジンとウォッカが出て来た。

「……………」

ジンは立ち去って行くアイリスをじっと見ていた。

「どうかしたんですか？」

ウォッカはアイリスが立ち去って行くのに気付かなかった。

「いや、何でもない。」

ジンはそう言い終えると、アイリスとは逆の方向に歩き出した。ウォッカもあとに続いて歩き出した。

第60章　　＼最期の約束＼

アイリスは組織の施設を出て、マンションの部屋に戻って来ていた。今まで自分は組織に騙され、利用されてた事に何も信じる事が出来なかった。

「（ねえ…由香さん、私はこれからどうしたら良いの？」

アイリスはもう居ない由香に問い掛けた。もしかしたら、私には此処に居る意味がないのかも知れない…。アイリスは窓の方を見た。窓からは満月と星が輝いていた。

シルフィアは深夜の高速道路を走っていた。深夜の高速道路は車の往来は少なく、進みやすくなっている。シルフィアは車を運転しながら由香からの最期の電話を思い出していた。

『…私の最期のわがままだと思って聞いてくれる。』

『分かった、聞いてやるよ。』

『私が死んだら…舞ちゃんの事…守ってあげて。』

由香の言葉は自分がもう生きる事が出来ない言葉だった。

『なに言ってるんだ！彼女を守れるのは由香、君だろ？』

由香の言葉にシルフィアは声を上げてしまった。

『私じゃ…もう守れないから。シルフィアにお願いしてるの…。』
受話器から聞こえる由香の声は命の燭が消えるぐらいの声だった。

『だから…、約束して…舞ちゃんを守るって…。』

『分かった、約束する。今、何処に居るんだ？』

シルフィアは由香の身に何かあったと悟り、居場所を尋ねた。

『ごめんね…、シルフィア。一緒に組織から逃げれる事が出来なくて…。』

由香はそう言い終えると、電話を切った。

『おい、由香！由香…！』

「（由香は本当に任務に失敗して殺されたのか…？）」

シルフィアは由香の死に疑問を感じていた。シルフィアは車を運転しながら由香の死の事を考えていた。

「（…いや、俺は違うと思う。本当は…本当は…。）」

翌日…、アイリスと連絡が取れなくなり、組織はアイリスが住んでいるマンションに向かったが部屋にはアイリスの姿はなかった。

第61章 戻りたくない場所

「どうやら、アイリスは部屋に居なかったみたいですぜ。」
ポルシェの助手席にウオッカが座っている。ウオッカは携帯を閉じてポケットに入れた。

「それと、部屋にあったパソコンのデータが全部消えてたみたいですぜ。あと、兄貴が言ってたメモリーカードは見つかってません。」
ポルシェを運転するジンにウオッカは報告した。ジンは報告を黙って聞きながら運転している。

「しかし…、アイリスは何処に行っただんですかね。」
ウオッカの言葉を聞いてジンは一瞬、不敵な笑みを浮かべた。

何時もの喫茶店でアイリスはコーヒーを飲んでいた。喫茶店は相変わらず人は少なく、落ち着くには良い場所だ。組織は今頃、自分の事を探してる筈。けど、私はもうあの場所には戻りたくない。

「今日はお一人なんですか？」
アイリスがそう考えている時、喫茶店のマスターがアイリスに近付いて来て尋ねた。

「はい…。」

アイリスは静かに答えた。

「ゆっくりして行って下さい。」

マスターはにっこり笑うとアイリスから離れて行った。

『舞ちゃん、今度一緒に遊びに行こう？』

この喫茶店は由香と会う場所であり、待ち合わせ場所でもあった。あの時、由香に遊びに行こうって言われて嬉しかった。由香と一緒に居て、今まで誰からも言われた事もない言葉を由香は私に優しく言ってくれた。だが、由香はもう此処に来る事もないし、もう彼女の姿も見ることもない。

そして、両親の事…。

組織は何故、両親の事を黙ってたのか？両親が組織の人間だと嘘までついて私を騙し続けて何の意味があったのか？アイリスは考えながらコートのポケットからメモリーカードを出した。部屋を出る前にこれを持ち出して来た。アイリスはメモリーカードをじっと見たあと、メモリーカードをポケットに入れて椅子から立ち上がり、マスターの所に向かった。

「マスター…。」

アイリスはマスターを呼び止めた。

「はい、何でしょう？」

マスターはアイリスに向き合って尋ねた。

第62章 く証拠と焦りく

喫茶店を出たアイリスは行くあても無く街を歩いている。

しかし、このまま途方に暮れて街を歩いても組織は必ず自分を見つけて組織に連れ戻すだろう。

その前に行動を起こさねばならない。組織に捕まらない為には組織を壊滅させなければならない。だが、組織の存在は世間は知らない。警察ですら知らない事だ。組織の存在を知ってるのはFBIなどだ。でも、FBIなどでも組織の全体を把握していない。組織を壊滅させるには組織が存在する証拠が必要。

「（証拠……。）」

アイリスは組織の存在を知ってもらえる証拠を考えながら歩いていた。その時、アイリスは急に立ち止まった。

「（確か…、組織の資料やデータを管理してる施設があった…はず。）」

アイリスはふっと、思い出しながら考えた。その施設には組織の所属する人間の名前や組織の施設の場所や組織に関するデータや資料が保管されている施設だ。アイリスはその時、思った。そこに行けば組織を壊滅出来るかも知れないと…。立ち止まっていたアイリスは再び歩き出した。

アイリスが行方不明になった事は俺の耳にも入って来た。組織はアイリスを見つける為に動き出したが、見つかったらどうなるかわからない。何としても、組織の人間よりも早く彼女を見つけないければならない。由香との約束：あいつを守る事は出来なかったが、由香が俺に託した最期の約束だけは守ってみせる。彼女を守る事を…。

「（しかし、アイリスは何処に行ったんだ？）」
シルフィアは車を運転しながら考えていた。だが、アイリスとまともに会ったのは二度だけだ。彼女の行きそうな場所など全く知らない。

「（こんな時、由香が居てくれたらな…。）」
由香なら彼女の行きそうな場所ぐらい知ってた筈だ。とにかく、彼女を一刻も早く見つけなければ…シルフィアに少し焦りが見えていた。

第63章 く裏切りの道く

「ここ…ね。」

アイリスの目の前には組織の施設が建っている。この施設に組織のデータや資料などが管理されている。施設は無人で必要がある時以外は誰も来ない場所。しかし、施設内のセキュリティは万全で組織の人間以外は簡単には入れない仕組みになっている。

施設の内部に入ったアイリスは廊下を歩いている。どうやら、今日は誰も来ていないみたいだ。

「（先ずはクリアー…ね。）」

アイリスは少し安心しながら歩いている。もし、組織の人間が此処に居たらアウトだ。私は組織に連れ戻させる。歩き続けていると、一つの大きな部屋にやって来た。この部屋が組織のデータを管理している部屋だ。アイリスは部屋に入り一台のパソコンに近付き、パソコンを起動させた。

「（組織のデータをコピーして警察に渡せば……。）」
警察に組織のデータを渡せば組織の悪事が全て表に出る。そうなれば、組織は終わり。そうなったら組織に関わった人達は救われ、犠牲者は出なくなる。

「（これで良いんですね？由香さん……。）」
アイリスの表情は少し悲しそうで穏やかだ。その時、アイリスは背後から何かで殴られた。アイリスは地面に倒れた。朦朧と視界の中に二人の男が立っていた。

「（ジン…、ウォッカ……。）」
アイリスの視界が真っ暗になり、気絶してしまった。

「気絶したみたいですぜ。」
ウォッカはアイリスが気絶したのを確認した。

「兄貴、アイリスをどうするんですかい？」

「組織を裏切る奴は…死あるのみだ。」
ジンの言葉を聞いてウォッカはポケットから拳銃を出した。

「拳銃は無しだ……。）」

ジンはウォッカが拳銃を取り出したのを見ながら言った。

「え……。？」

「こいつを使う。」

ジンはポケットから小さなケースを取り出した。ケースを開けるとAPTX4869が入っていた。ジンは気絶しているアイリスに飲ませた。

「ウォッカ、この施設を消せ。」

ジンの発言にウォッカは驚いた表情をしている。

「…良いんですかい？此処には組織のデータが管理してやすが…。」
ウォッカは確認する様に尋ねた。

「あの方の許可は取ってある。」

あの方の言葉を聞いてウォッカは少し安心した。

「分かりやした。」

ウォッカはそう言い終えると、どこかに走って行った。ジンは最後にアイリスの方を見た後、部屋から出て行った。

第64章 　　すべての始まり

「（ここは何処…？）」

アイリスが居る場所は辺り全体が真っ暗で先が全く見えない。一言で言えば此処は…闇。アイリスは辺りを見渡して此処が死の世界だと思った。

「（死んだの…ね。）」

アイリスはゆっくり歩き出した。歩いても歩いても何も見えず、同じ暗い闇だけが続いている。死の世界はこんな物だとアイリスは思った。

「舞ちゃん！」

その時、アイリスの背後から由香の声が聞こえて来た。アイリスは立ち止まり、後ろを振り向いた。

「由香さん…。」

アイリスが由香の名前を発言すると、アイリスの体が光りに包まれた。一緒にして闇に広がった場所が光り出した。

アイリスはゆっくり目を覚ました。そこは組織のデータを管理して
る場所だった。この時、自分は生きてると実感した。

「私、生きてる…。」

アイリスは疑問に思った。気絶する前にジンとウォッカが目の前に
居たのは事実だ。何故、ジン達は組織を裏切ろうとしていた自分を
殺さなかったのか？殺す理由が無くなったから？それとも、わざと
見逃したのか？

「（そんな事…ないわ。組織が見逃すわけが…。）」
アイリスが考えていると、煙りの匂いが充満してきた。

「（煙り…。まさか、火事？）」
アイリスはゆっくり立ち上がった。その瞬間、違和感を感じた。周
囲の景色がさっきよりも低く見える。上を見上げると天井までの距
離が遠く感じた。下を見ると自分が着ていた服がぶかぶかだった。
この時、アイリスは直感した。自分の姿が子供の姿になっていると
…。

「（どうして子供の姿になってるの？）」
アイリスは自分の身に何が起こったのか分からなかった。さっきま
で大人の姿だった自分が気絶から目覚めてから子供の姿になってい
た。

「（まさか…、APT X 4869。）」
アイリスがそう考えていると、部屋の奥から火が迫って来ていた。
今は此処に居てはまずいと判断して慣れない姿で部屋から出て行っ
た。

アイリスは火事から逃れて施設から出た。施設から離れた場所で紅く燃え上がる施設を見ている。施設から出る煙りが施設を覆いながら空に上がって行く。

「（これで…、組織の存在を世間に知らせる事は出来なくなった…わね。）」

アイリスは悔しそうな表情で燃え上がり施設を見ている。

「（そんな事より、これからどうしよう。）」

子供の姿になった自分には知り合いも親戚も居ない。こんな形で組織から逃げれる事には成功したが、自分には行く場所がなかった。その時、後ろから消防車のサイレンが聞こえて来た。

「（先ずは此処から離れなきゃ…。）」

アイリスはこれからの事を考えながら歩き出した。

この一步が全ての始まりだった。彼女はこの時、まだ気付かなかった。いろんな人と出会い、組織を追うFBI、CIA、そして小さな探偵に…。その出会いが彼女のこれからの生きる道が変わり、組

織を壊滅させる事が出来た。
彼女は生きる為に最初の一步を踏み出した。

最終章　く新たな始まりく

俺がアイリスが死んだ事を聞いたのはアイリスが死んだ5時間後だった。俺は結局、組織よりも早く彼女を見つける事は出来なかった。

「（また、約束を守れなかった。）」

ショッピングモールの時も由香が死ぬ間際に託した最期の約束も守れなかった。

「（俺は最低な人間だな。）」

悔しい気持ちと悲しい気持ちが込み上げて来た。シルフィアは今にでも涙が出そうだった。もし、三人で組織から逃げれていたら幸せを感じる事は出来た筈。楽しい思いもくだらない冗談を沢山話せた筈。それを奪ったのは組織だ。

「（俺は決めた。由香やアイリスの為にも組織を潰す。）」

シルフィアの瞳は決意に満ちていた。

「（それが、俺に出来る最後の約束だ。）」

シルフィアは由香とアイリスの事を思い出しながら、彼女達に届く様に約束を誓った。

屋上のドアが開く音がして舞は屋上に出た。この場所は由香と初めて出会った場所だった。舞はそよ風を感じながら景色が良く見える所まで歩きいて立ち止まった。あの時、由香が現れなかったら私はもう此処には居られなかった。

「（由香さん聞いて、組織は壊滅した：よ。）」

舞は空を見上げながらもこの世には居ない由香に言った。組織が壊滅直後はテレビやニュースで騒がれた。更に組織のボスが警視庁の刑事部長と発覚した時は世間はさらに驚き、警察に対するバッシングなどがあった。そのバッシングも直ぐに収まったが犯罪組織が無くなっても犯罪はなくなる事はない。今も何処かで犯罪は起きている。それは変わる事はない。

「（組織を逃げ出せれる勇気や生きてる幸せをくれたのは由香さんだと思ってるから：。）」

舞はどこか淋しげな表情をしてるが幸せそうな表情にも見える。

「（貴方に出会えて本当に良かった：。）」

『私も舞ちゃん会えて良かった。』

舞が由香に感謝すると風の音と共に由香の声が聞こえて来た様な気がした。舞は辺りを見渡して幸せを感じさせる様な微笑みを見せた：。

今日で組織が壊滅して一年が経つ。戦いは長かったけど、今は時間が過ぎるのがあっという間だ。組織が壊滅してからの一年は今までとは違う生活だった。組織に居た頃には味わえない時間だった。こ

の時間が幸せの時だった。しかし、この幸せはもうすぐ終わってしまう。終止符を打った闇が動き出し、襲い掛かって来る。そして、今までにない悲劇が始まる。この時、彼女はまだ知らなかった。全ての始まりは新たな始まりの序章。一つの終わりが新たな悲劇のホイッスル…。

＼影の世界・完＼

最終章　く新たな始まりく（後書き）

こんにちは紅佐洲仮です。

『影の世界』を最後まで読んで頂いてありがとうございます。

なんとか最後まで書く事が出来ました。

また、次回もよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9961g/>

影の世界

2010年10月9日01時22分発行